
ななしのワーズワード

奈久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ななしのワーズワード

【Zコード】

Z3817Y

【作者名】

奈久遠

【あらすじ】

世界最悪のサイバー・テロリスト『ワーズワード』。彼は己の生命をかけたある計画を実行するが、それは原因不明の失敗に終わってしまう。結果、地球とは全く異なる世界に飛ばされてしまい……そして、ワーズワードの冒険が始まる。

Warp World 01

ある『計画』を立ててみた。

今までの仕込みは上々である。

オープンテラスのカフェスペースでランチの到着を待つ間、俺はエアロビューを立ち上げ、暇つぶしすることにした。

そういえば、『ワーズワード』の如で呼ばれるようになったのはいつからだつたか。

自分の脳内にある記憶野を検索しても良かつたが、ネット上の検索サイトの方が、よほど手間がかからない。

ワーズワード による検索結果 約 1,768,400 件
(0 . 832 秒)

検索結果の上位には、ニュース記事及び、それをネタにした掲示板へのリンクが並ぶ。

そこに躍る文字は、どれも物騒なものばかりだ。

21世紀最悪のサイバーテロ。破られた世界最高のセキュリティ、崩れたCOIN神話。犯罪史上最大の被害額。麻薬カルテルを壊滅、正義の使者ワーズワード。情報提供者に賞金支払5億COINを検討

エアロビューを流れる同じような記事、そのどれもが自分の行いの履歴だが、その中でもつとも目につくのはやはり、『COINサバーハッキング事件』を取り扱つたものだ。

COIN Cash Obtainable In Network
orks savings は世界統一通貨サービスの略称及び、
そのチャージデバイスの愛称である。

これまで無数に発行されていた、いわゆる電子マネーが全世界規模で統合されたのは何年前の話だったか。

統一通貨名については、元と円が早々に負け、ユーロとドルとの一騎打ちとなつたが、アジア諸国及びアフリカ勢の強烈な横やりにより、最終的には新たな統一通貨名『COIN』が正式採用されることとなつたのだ。

そしてチャージデバイスとしての『COIN』は、亜金属製の円貨型デバイスで統一されている。この場合の円貨とはジャパニーズ『Yen currency』ではなく、丸いタイプの貨幣、という意味だ。

直径3cm大、やや大きめのCOINは、掌に握りしめて認証デバイスにかざすことで認証される。

COINには世界最高のセキュリティとして、『ミーム認証』が用いられた。

『ミーム』とは、人類のみが持つ個人識別が可能な情報遺伝子である、らしい。らしいというのは、それは完全に『COIN』に特化されたブラックボックステクノロジーであり、一般にはミームなるものの技術情報は一切公開されていないからだ。

21世紀の巨人、ノーベル・サイバーテクノロジー賞3年連続受賞のサー・エクシルト・ロンドベル教授の完成させた、このミームなるヒト識別技術はまさに完璧であり、世界最高と言つに異論はなかつた。

だが、それは破られた。
正確には俺が破つたわけだが。

ハッキングに成功したとはいえ、そこはさすがの世界一の技術の詰まつたサーバーである。

俺がそこにアクセスできた時間は、3分32・550秒のみ。

そんな短時間で行えたのは、事前にリストアップしておいた、チヤイニーズマフィア・コロンビアカルテル・ジヤパーズヤクザと言った、暴力と麻薬で生計を立てている人種に関連するCOIN口座のセベラルパーセント、126万8052口座の残高を0に書き換えることくらいだった。

もつとも俺の興味はミームなる技術の解析にのみあり、その後の口座消去はただのお遊びだったのだが。

だつたのだが、世の中的にはそのお遊びは思つたより大事だったようだ。

電子空間に溶けて消えた闇資金は日本円にして27兆2000億あまり。単一個人が起こした事件の被害額としては、世界一となつた。

もちろん口座情報だけでなく、入出金明細、ミーム情報、バックアップもキッチリと消してあげたので、削除された口座を復旧されるには、厳正な本人情報確認が必要とされた。削除された内の26・85%は口座名義人が名乗り出ることなく、また本人確認に訪れたアホの子がその場で逮捕されたりと、一連の報道はなかなかの盛り上がりを見せた。

手を抜かないからこそ遊びは面白いのだ。

ネット上の無責任な議論は、その被害者が犯罪集団であることにに対する喝采と、世界最高のセキュリティを突破したその技術力の高さを賞賛する方向に傾き、名もなきサイバーテロリストは一時英雄

と呼ばれた。

だが続いて、被害者の数十万人が世界中で同時多発的に発狂した。そんな、地球を沸騰する地獄の釜の底に突き落とす事態となつては、その名声も地に落ち、俺は世界最悪の犯罪者として、めでたく憎悪の対象へと昇華した。

『ワーズワード』の名はその頃から呼ばれ始めたものだ。調べてみると当時無名の俺に懸賞金をかけるにあたり、米国『STARS』^{〔ドネーム〕}が付けた識別名であるとのこと。

ほう、それは今初めて知った。

『ワーズワード』という響きが気に入つた俺は、その後の印核軍事施設乗つ取つてみるテストや、ハッキングした人工衛星影像による金成恩^{〔キム・ソンウン〕}8・760時間追跡動画をYouTube（アイチューブ：フリーの動画投稿サイト）で公開した際には、その名を使わせてもらった。

米大統領選の電子投票ジャックは、民主党候補のアホが「『まだ核物質を放出し続ける日本に、その収束まで継続的な懲罰金を課すべきである』などと、アホなことを言い出すから、仕方なくやつただけである。大変遺憾である。

とはいって、選挙地図を真つ赤にしたのはやりすぎだったかもしないな、反省。

ハッキングがばれた後の再選挙でもアホの方は普通に落ちたので、別にやらなくてもよかつたかもしね。

その行動のどれもが世界に衝撃を与えた、やがてワーズワードの名

を知らぬ者はなくなり、俺はついに世界の敵たる23人のテロリスト
ト『エネミーズ23』の中でも最高賞金首の指名手配犯となつた。

あらゆる人類の生存活動から、既にして切り離せなすことのできない電子ネットワークの領域を脅かすこの俺は、まじつことなき世界の敵だ。

それを俺は否定せず、また自らの行動に、一切の後悔も反省もない。

『できるからやった』

それだけだった。

Warp World 01 (後書き)

折角ユーチャー登録したので、お話を投稿してみるテスト

「お待たせいたしました」

そこで、ようやく注文のランチパスタが到着した。

道路に面したこのオープンテラスには心地よい陽射しが降り注いでいる。

やはり食事は明るい場所で取るのがよい。

そして、これが最後の食事になる。

俺はパチリとHアロビューを開じると、スプーンとフォークを手に持つた。

俺の帰宅を識別したハウスキーピングシステムが、自動的に室内をライトアップし、気温の調整を始める。

PCルームにつく頃には、『アイシールド』もすぐに装着可能な状態にスタンバイされる。

パソコンの主流は、汎用機からデスクトップ、ノート、スマートフォン、Hアロビューと、その時代を反映して変遷してきたが、やはり最新のヘッドマウントタイプ、『アイシールド』は最強だろう。

モバイル利用はHアロビューで我慢するしかないが、感應入力の

快感と、球面立体ディスプレイの感動を一度覚えてしまった者が、GUI（Graphical User Interface）のみをサポートするオールドPCに戻れるはずもない。

アイシールドを装着した俺は、思考により行動し、思考により喋り、思考により存在する、ネットの住人たる仮想体となる。
アバターは正式には VUI（Virtual User Interface）といい、感應入力をサポートした第三世代インターフェイスである。

ネット上のオープンスペースに出れば、自分と同じような、それでいて千差万別のアバターにすれ違うことができる。

通貨がネットワーク上でやり取りされる世界経済がリアルであるならば、アイシールドにより、実現される仮想世界もまたリアルである。

アバターというインターフェイス上で、巡回サイトをチェックし、エアロビューを開き、動画を見たければテレビを付ける。
新聞紙コンテンツでニュース配信を受け取り、動画再生時は映画館アプリを利用する。

それは、現実世界の自分自身となんら変わらない行動様式だ。
『パソコンとネットワーク』が創りだす仮想の空間は、人類にとっての、もう一つの世界として成立していた。

時計を見る。時計は14時12分、帰宅後20分が経っている。

「さて、そろそろ時間だな」

ネット内でサーディスプレイを立ち上げ、中国国家航天局の人工衛星「中天王88」にアクセス。

コンソール起動、キー入力、全てが3秒以内に完了する。物理的な行動を必要としない感応入力は思考の速度がそのまま、操作速度となる。

俺くらいアバターを使いこなせるようになれば、下手なマクロを起動させるより、その場でリアルタイムコーディングを行った方が早いくらいだ。

手早く中天王88のサテライト・ビューをハッキング、近地上観測モードに切り替える。

中天王シリーズのメインOS「大鵬」^{ダーペン}は純中国産、オープンソースでもここまで酷くないだらうとの評価を受けるセキュリティホールの固まりだ。

その割に、並列処理の性能は比較的高く、一機あたり、200～300のバックドアプログラムをパラレル実行できる。

サテライト・ビューの解像度は高くないが、シリーズ100機を超える人工衛星で、ナゼカ日本國土のほぼ全域を網羅しているため、日本国内のパブリック、またはプライベートスペースをライブ中継するには、大変優良な機体なのである。

地上監視カメラをコントロールし、ターゲットポイントにズームをあわせる。

ズームするポイントは、俺のこの家だ。

大通りには覆面パトカーが10台と外交官ナンバーを付けた防弾ジープが5台、裏口方向に自衛隊の車両が3台。パークリングにはJ-テレの報道車、空中を舞うヘリの姿も見える。

警察は想定内として、そうか、マスクも動くか。

地上をちょこちょこと私服警察官が歩き回る。家を取り囲む人数

はS T A R Sと自衛官を合わせて、40名程度。アメリカ国家安全保障局（N S A）直轄のサイバーテロ対策部隊『S T A R S』最高閣議は、武器を持たない民間人一人の拿捕には作戦チーム10名体制で十分だという結論を出したはずなのだが、なるほど日本政府が横やりを入れたわけか。世界の敵たる『エネミー23』、それも史上最悪、最高賞金首のサイバーテロリストが日本人では都合が悪かつたのであろう。

警視庁を前面で動かし、テロリスト逮捕の瞬間を全世界に見せしめるTVショーにしてあげ、日本の警察が捕まえたのだという、大義名分が欲しかったというわけだ。

俺としても日本の評価を下げることは本意ではない。心から賛成できる作戦変更だ。

S T A R Sとしては、その横やりによつて逆に俺を取り逃がすのではないかと心穏やかでなかろうが、まずは安心して欲しい。

万が一にも俺を取り逃がすことはないし、パソコンには俺がワーズワードであるという最小限の証拠も残している。誤認逮捕の線はない。

そもそも、ワーズワードの拠点情報を流した匿名さんはこの俺なのだ。その信用度は100%だろう。

今日は世界の敵『ワーズワード』が逮捕される日だった。

キンコン

家のチャイムが鳴らされる。

これは、来客を知らせるものではない、作戦開始のカウントダウンの合図だ。

STARS及び警官たちの強制突入まで、あと30秒。

では一からもそろそろ『計画』を開始しよう。

そしてそのためにはまず『ニーム』について、少し解説を加えねばなるまい。

ワーズワード始まりの事件、COINサーバーのハッキング。目的は『ニーム認証』という未知なる技術に対する純粹な興味だったのだが、それをハックし、本質を理解するにあたり、俺は大いなる驚愕に包まれた。

『ニーム』は、個人認証を目的とした単なるヒト識別技術ではなかった。

ニーム情報は、個体を識別する情報でありながら、常に変化する。変化しながら、それでいて常にユニークな個人を指示示す。

最初俺は、それを毎秒変化するパスワードのよつなものだと認識していた。
だが違うのだ。

例を出せ。

生まれたばかりの赤ん坊のミームを記録したとする。
赤ん坊が成長するにつれ、ミームも増大、複雑化する。だが、それで居て同じその赤ん坊個人を示すことができるのだ。

赤ん坊が青年になる。するとミームは変化する。
青年が食事をする。するとミームは変化する。
青年が恋をする。するとミームは変化する。

不本意ながら、あえて、形而上の言葉を借りて説明するなら、遺伝子がヒトの『肉体』を形作る情報であるならば、ミームはヒトの『魂』そのものの情報なのである。

『魂』で納得できなければそれを『脳』と呼び替えてよいが、ミームの本質はシナプス配線構造という物理的なものではない。形而下ではそれを説明できない、故に『魂』だ。

そして。

そして、世界銀行協力のもと、天才サー・トクシルト・ロンドベルはヒトから『魂』の電子的コピーを抽出することに成功した。それが『ミーム認証』技術というわけだ。

世界銀行の秘匿する『ミーム認証』が、魂を認証する技術だと理解したときの俺の興奮は、黒歴史として、永久に抹消せざるを得ない。

そして、『ミーム認証』がブラックボックステクノロジーとして秘匿されている理由は、技術的な話ではなく、神学的な理由に由来するのである。

とかく、神の領域を犯す科学技術は、非人道の烙印を押されるものだからな。

ミームについてはこの俺でさえ、その利用法・識別方法を解析できただけで、原理的には全く納得できていない。

だがそれが対象個人を誤差なく識別できることに間違いはなく、俺というイレギュラーさえいなければ『COINE』システムのセキュリティは、最低20年は破られなかつたはずである。

……まあ、自画自賛は置いておくとして、その技術をハックし、ミームの本質を知ることとなつた俺は、その更に上を行く計画を立てた。

魂とミーム情報は完全なる相似形を保つ。ならば、魂とミームの存在位置を置換することができれば、魂の在処が肉体である必要はなくなるのではないか？

それが俺の発想の原点である。

これは単なる妄想ではない、今の俺 パソコン内のアバターとして思考・行動している状態 が、形だけであれば、まさに『肉体なくして俺自身が存在する』状態そのものだからだ。

この計画により、俺の真なる魂はネット上のアバターに宿り、俺の身体はそのコピー『ミーム』のみを宿すことになるだろう。魂なき肉の塊というやつだ。

成功すれば今後必要なくなる肉体からだだが、それはそれ。長年使つてきた愛着ある俺の肉体だ。

身よりのない俺には、抜け殻となつた肉体を維持してくれる親類縁者が居ない。

大手の病院施設に費用を支払えば、ある程度は可能かも知れないが、脳死状態の俺の扱いに対する信用度が低い。

その点、『STARS』は信用できる。

俺のパソコンには物的証拠として、法廷で立証できるだけのものは残していないため、必ず俺自身の自供が必要となる。彼らは、俺の生命の維持に全力を傾けてくれるだろう。

追求のために。

裁判のために。

正義のために。

それも全て無料でだ。

ドンツドンツ ガシャン!!

ジャスト、30秒。

STARS及び、警官たちの強制突入が開始された。

同時に自衛隊の手によってこの家に対する外部電源供給停止、電波ジャミング（ネットワーク封鎖）が行われる。さすがにそれは対策済みだが。

サイバーテロという個人レベルの犯罪に対するは、結局人間という物理リソースを利用した直接的な武力行使こそが唯一にして、最大の効果を持つのは間違いない。

金属弾頭の制圧兵器により、リビングの強化ガラスが割られ、ハウスキー・システムが警報を発する。玄関も同じような状況だろう。

全ては、計画通り。

何も知らせてはいながら、『ベータ・ネット』の連中の反応も楽しみだ。

それではそろそろお別れしよう。

さらば、俺の肉体。

俺はそれ以上の感慨もなく、淡々と実行キーを押した。

そして 世界が変わった。

Warp World 03(後書き)

『ニーム』についてはあくまでこの物語の中での取り扱いを説明しています。

一般的にWikipediaでいう概念とは異なるものでござりょーしょーお願いします。

つまり「この作品に登場する全ての個人・団体・概念等は架空のものであり、ザッソールフィクションです」OK?

まるでブラックホールに吸い込まれたかのような、強烈な引力。それは一瞬の出来事。めまいに似たよろめきと共に、一步を歩き出したことで、そこに大地があることが認識できた。

いや、”歩く”という認識がまずおかしい。アバターにとって、歩くという行動は、歩くという思考であるからだ。

つまり、思考なき行動は、未だ俺には肉体があるということを意味する。

まさか、失敗、したのか。

考えられない。

だが、まずは現状認識が先だ。

疑問を解消するには、情報が足りない。

それは決して、強靭な精神力の賜物というわけではない、情報不足こそが最大のリスクであると判断した結果の、理性的な行動である。

今度こそ、しっかりと大地を踏みしめ、あたりを見渡す。

……は？

そして得られた膨大な情報の前に、今度こそ、俺の思考は完全に停止した。

俺が今いるのは、林の中の小径であった。道は平坦ではなく、登

る道と下る道、山間を通る林道か、あるいはそのまま山頂へ続く登山道であるのかもしれない。

高く林立する樹木の群れは、まるで先が見えないが、整地された小径は人の存在を感じさせ、孤立の不安を湧かせることはなかつた。

日は高いようだが、高い樹木に覆われた小径に落ちる木漏れ日は少なく、林の中にしては鳥の声も少ない。

それに恐ろしく林気が濃い。濃密すぎる負のイオンは逆に五感を狂わせ、あるいは幻惑するかのようであつた。

といふか。

……実際にイオンが目に見える。

木々の間を漂う光の粒。大小様々で、小さなものはおそらくゴマ粒程度、大きなものではピンポン球サイズのものもあるため、全てを粒と呼ぶには多少難があるかもしれないが、まあ便宜上『粒』と呼ぼう。

光の粒は、色とりどりである。基本的に白と緑が多いが、中には黄色や青、赤いものが混じつてゐる。視界を遮らない程度に空中に漂うそれは、自分で言つた手前の否定になるが、おそらくイオンなどではないだろう。どちらかといふと、ネオンの方が近い。

すつと、手を伸ばして見るが、思つた通り触ることができない。触れた瞬間消えてしまつたり、あるいはすり抜けたりする。

そして、それはただ漂つてゐるわけではなく、ごく弱い磁力で引き寄せられる砂鉄のように、俺の身体にまとわりついてくるのだ。触れない割に手で払うという行為は有効らしく、軽く手を振ると

散らすことができる。

「これは一体なんなのだろう

そこで、俺はもう一つ、この光の粒が集まっている場所を見つけた。

小径に面する、一本の木の裏のあたりになにやらわだかまるのだ。

「 なにがあるのか？」

声に出した瞬間、

チャキ

金属が擦れ合つ音が聞こえた。

右も左もわからない今の状況では、全てを警戒するべきだという判断の元、その危険性を認め、行動の優先度をその確認に割り振る。

音のした場所へ回り込んだ瞬間、その前に突きつけられた鋭利な鈍色の反射を認め、俺は脚を止めた。

そこには『武器』を構えた、識別：第一接觸者の姿があった。

「杓失・・杓失酌軸爵写釀漆灼鳴柴酌」

そして、理解のできない言葉。

「……そつきたか」

俺は、『武器』の危険性よりも、現状認識につながる大きな情報の取得ができたことに、思わず綻んでしまった。

識別：第一接触者の発した言葉が日本語でないことは確定であり、また英語、中国語といったメジャーな共用語ではない。

もちろん地球上には俺の知らない言語もあるが、俺はそれを、識別外言語であると認定した。

それを肯定する材料の第一が相手の姿である。

そこに居た識別：第一接触者は女性だった、いや……十代の少女と言つた方が適切であろう。日焼け一つない、雪の結晶で作られたような白い肌。基本白人の特徴を持ちつつ、髪は青。染めているのでなければ、地球上には存在しない髪の色。耳も不自然に長い。背丈は俺より20cmほど低い。年齢に合致した身長というよりは、栄養の足りていない人間に見られる、成長不全だろうか。

それを証拠に、少女を構成する身体のパーツ一つ一つが、全て細いのだ。当然のように胸も薄い。

だがそれは、その少女を美しいと表現することをなんら拒否するエレメントではなかつた。

事実、美しいのだ。

少なくとも俺は、これほど美しい造形を持つ生身の人間を見たことがない。

その色素の薄い露草色の瞳には、警戒とおびえの色があった。

そして、第一にその衣服。

視線を落とせば、少女が身に纏うのは、金属部分に鋆が浮き全体として赤黒く変色した革鎧と、その下には質の悪い麻製と思われる

上下。足元はメーカー印もない、粗末な革製の靴。

手には、これまた博物館でしかお目にかかるれないような、アイアンソード。

その重さに耐えられないため、何ともアンバランスな姿勢になっている。

青い髪と透き通る肌を持つ、まるでおとぎ話から抜け出してきたような少女に、ぞぐわぬ使い込まれた革鎧。

以上二点を現実をして受け取るのであれば、そんな人間の存在するここには地球ではなく、それゆえ、その言語は識別できるはずもない。それが俺の判断だった。

そもそもアイアンソードの時点でありえないだろう。もしここが地球上であれば、それがどのような最貧国であつて、武器は銃である。

再度口の中へ、言葉を落とす。

「これは俺の知る地球ではありえない、と。

Warp World 04 (後書き)

1J1Jまでのまとめ・スイッチオン 異世界 で4話消費。

「ここは地球ではない。

その己の判断を支持、即座に「常識」という物事の枠組みを捨て去り、まずはそこまでの認識を持つ。

何も判然らないという状況に代わりはないが、「何も判然しないことを前提に情報を取得すべき」だという行動方針が策定される。であれば、次なる行動は相手に対する前提条件の付である。

「落ち着け。そちらの言葉は通じていない」

俺は『日本語』で、言葉を紡いだ。

驚きと共に、少女の露草色の瞳に困惑の色が混じる。

そこで少女も気付いたのだろう、言葉が通じていないことに。

その共通認識こそが俺の付した前提条件。

少女を、言葉が通じないという自分と同じ盤上に立たせたのだ。今後のやり取りは、その共通認識を前提に進めることができる。

「写糸漆灼鳴柴酌？」

おそるおそる、次なる言葉を続ける少女。

俺はそこから、次なるタスク。その言語の解析作業を開始する。

始め、こちらを警戒していた少女。

得体の知れぬ相手とコントクトを取る場合の言語選択としては「何者であるかの誰何」「敵味方の判別」「警告」あたりが推測される。

さらに、じちらから「言葉が通じない」ことを直接的に伝えた際の反応が、更なる警戒ではなく、困った様子であつたことを考えれば、敵対意志に重きを持つていないと、つまり「何者であるかの誰何」に属する言葉であつたと仮定される。

そこを起点に、前提条件の付「前後での共通部分「灼鷗柴酌」（の発音）がその「何者であるかの誰何」に属する意味であると、まずは推測する。

その「まず」という仮定を起点に、次は、検証を行つ。この場合の検証とは、それが「あなたは誰ですか？」と言ひ意図の言葉であると仮定し、同じ言葉を出力する行為を指す。

「灼鷗柴酌？」

補助として、異言語間でもつとも有効な言語「ボディランゲージ」柔軟な表情と手の平を相手に向ける動作 を交えて検証を行う。

もし先ほどの仮定が間違つてゐるのであれば、間違つてゐることに属した検証結果が返つてくることだつ。

その時は先ほどの仮定が否定されたと判断し、次の仮定を元に検証を行えばよいのである。

検証結果は明快であった。

「杓、杓鷗柴葱邊紗屢鹿」

少女は少し安心した表情で、そして幾分緊張氣味に、革鎧の上に手を沿わせ、そう答えた。

とりあえずは言葉が通じたことに安心したのだと理解して、間違いない所作であった。

先ほどの仮定を正として、そこからさらに解析を進める。一步前進だ。

先ほどの言葉が「あなたは誰ですか?」の意味であるのだから、次の言葉には自己の名前を明かす意味が含まれているのだと推定する。

そこには含まれるべき言語体系としての蓋然性、主語の存在を解析する。

おおよその言語では主語は、文頭にくる可能性が高い。そこに着目すれば先の少女の言葉の文頭にあつた「灼^あ」と「杓^な」、発音の類似性からみても、これが「灼^あ」^{あなた}「一人称」^{（私）}と「杓^な」一人称（私）であると仮定することは難しくない。

主語につながっており、かつ單文の中で多く出てくる「鷗」の発音部分は単独で意味を持たない接続語であると類推し、解釈上無視する。

同様に名前に関するやつ取りから「柴=氏名」の意味、かつそれ以降を氏名の固有名詞であると仮定する。

固有名詞はその意味を追う必要はない。発音そのままのままでよい。

であれば

紗屢葱邊鹿=シャルローフェル。それが彼女の名か。

まず少女と指さし、

「灼鳴柴『シャルローフル』」

「簾！」

「クククといなずく少女。長い耳がピッピピと動くのは感情の表れだらうか？」

問題なく、通じてこむみつだ。

そして、次は自らの胸に手を沿わせ、

「杓鳴柴」

……そこで、一つの思考が挟まれる。

俺の名前。当然日本人として名乗るべき、呼ばれるべき名がある。だが、俺は先ほどその肉体に別れを告げたばかりだ。であれば、俺の名乗るべき名は、

「杓鳴柴『ワーズワード』」

であるべきだらう。

「簾！ 燐璽燐眞！」

いひらを指さす仕草。ちゃんとコントクトが取れたこと、喜びのままの笑顔になる少女。アイアンソードの切つ先は既に取り下され、その重みで柔らかい腐葉土にめり込んでいる。

意志疎通の第一段階がクリアされた瞬間であった。

始めにあつた警戒は、一いちらがあまりに無防備であること、さうに片言であれ言葉が通じることで払拭されたらしい。もちろん装つまでもなく、敵対意志はないのだから、これを機にさらなる解析と検証を進めさせてもらひ。

わからないものをどの程度わからないのか判定する。次に手持ちの情報を元に順次解析する。

データを取得し、仮定し、検証する。仮定が間違つていれば、立ち戻り、訂正を行う。

その繰り返しを一つのプラクティス単位として、反復を繰り返す。つまり会話を続けることでその精度を高めていく。

それは驚くべき言語感覚と映るかも知れない。

だが、『世界最高のハッカー』と呼ばれた、俺にとってはなんら苦のない作業。

そう、これはハッキングである。

その対象がコンピュータプログラムから、不明な言語に変わっただけである。

もちろん、ここにエアロビューーの一台でもあれば、その効率は更に上がることだろうが、俺にとってはデータの展開先が、パソコンのメモリ上であるか己の脳内であるかの差だけだった。

じうと壊つることもない。まあ現状分析を続けよう。

「えつ、本当に、全く言葉がわからなかつたんですか？」

「正確には今でもわかつてはいない。俺の言葉が通じているのか、シャル君の反応を常に確認している」

「ちゃんとお話できていますよ。最初だけわかりませんでしたけど、その後は全然」

林中の小径を、下る方向に歩きながらの会話である。

シャル・ロー・フェルニ。見た目上の年齢は十代前半。線の細い少女であるが、だからといって性格までが細いわけではなかつた。

一度警戒がとけた後は、積極的に話しかけてくるため、日常会話レベルなら支障なく会話できるまで言語解析がすすんでいた。

「それは君のその目の陰だな」

「目？」

自分の目が見えるわけでもなからうが、むうと瞳を中央に寄せようとしている姿がノミカルである。

「俺の国にはこんな言葉がある。『口ほどきのものを言つ』と」

ただ発声だけのやり取りであれば、これほど短期間には解析が進まなかつたであろう。

表情豊かな彼女の仕草一つ一つが解析情報の手がかりとなり、検証効率を高めたのである。

「田で喋るんですか！ わ、私はそんなことできませんよ！」

驚きに、彼女の大きな露草色の瞳が、更に見開かれる。

「いや……それは物の例えであつてだな。こちらの場合で言えば『耳は口ほどにものを言ひ』か？」

「こんどは耳？」

小首をかしげるかわりに、その長い耳がへによじと折れる。

この世界の人間の特徴なのだろうか？

彼女の感情に合わせるかのように、ピコピコと動くその耳は見ていて飽きない。

「ちょっとといいか

「はい？」

さわつ

気になつたので、触つてみる。

瞬間、ビクンと、シャルの身体が硬直した。

「ツ！」

「ふむ？」

やわらかい。

さわせわつ

さわせわする回数に合わせて、シャルの新雪の肌が徐々に赤熱し、露草色の瞳がまんまるく見開かれしていく。

「兎、
「ぴ？」

「兎^{トトロ}熙熙平 ！」

林間にこだまするほどの高い声が、響き渡った。

キーインと突き抜ける耳鳴りに耐えつつ、

「すまない、今のは聞き取れなかつた。もう一度頼む」

俺は冷静にその言語の解析に入る。

ズザツッと跳ね飛ぶように身を離すシャル。耳が針金でも入ったかのようペーンと、立っている。

それを両手で隠して、半涙目で、俺を睨み付けるシャル。睨み付けるその表情もまた、魅力的である。

「いや、いやにをしゆるのですかあ！？」

「耳を触らせてもらつただけだか

「み、み、耳れすよ！」

「耳だな」

「だ、だめでしょーー？」

「だめなのか？」

「あ、あたりまえですっ！」

なぜか口調が乱れているシャルに対しあくまで冷静な受け答えを行つ。

その淡々とした姿にシャルは、大きくため息を落とすと、

「そうでした、ワーズワードさんはこのあたりの人ではないんですね。……今回だけは許します」

日本からきたといふことはすでに伝えてあったが、シャルの中では「どこか遠い場所」というインプレッションがされたようだつた。日本が別の世界にある、などといふことは想像の埒外だらう。俺も細かい状況を伝える気はない。

情報取得の作業を優先するためだ。

「そうか、ありがとうございます」

「今回だけですよ！」

「わかった。次からは許可を取ることにする」

「きよ、許可なんてしませんっ！」

真っ赤になりながら、断言するシャル。

たわいのない、じやれ合ひのよくな会話。
こんな会話をしたのはいつぶりだらう。

……いや、おそれなく俺自身で言えば、そんな経験はないはずだ。

ドラマかアニメか、作られたコンテンツの中のキャラクターが行つていたものを、己の体験として錯覚したのだらう。
それを寂しいことだと考える人間もいるだらうが、まあ今時の若者の経験値など、そんなものだ。

「…………、ワーズワードさんはいじわるです（小声）

その小さな呟きもしっかりと耳に届いているが、意図的に無視す

る。

折角「//」ニケーションがとれるよになつたのだから、質問したいことは沢山あるのだ。

「それより、さつきから空中に漂つてゐるこの光の粒がなんなのか、教えてくれないか」「光の粒……ですか？」

シャルにまとわりついているのは、主に白い光の粒である。

俺の方は、色とりどり、手で払わないと視界が遮られるほど集まつてきてうつとおしいのだが、シャルの方はそれほど多数ではないため、気にならないのだろうか。

「なんですかそれ？」

シャルがきょとんとした表情で、問い合わせる。

丁度、その大きな瞳の前を、大きめの光の粒が通過するが、シャルは全く反応しない。

「……見えていないのか？」

「ええつと、光なら見えていますが」

「それは、地面にできた木漏れ日の円だらう」

「これだ、これ」

試しに、自分にまとわりついているものの内、一番目立つ赤色の粒を指さしてみると、

「ん~、すみません、わかりません」

耳をへにょりとさせるだけだった。

それはそれで、十分な検証結果である。
シャルに見えないものが俺に見えてい、という情報が得られた
わけだ。

「あの」

「なんだ」

「こんな山の中に突然現れるなんて、ワーズワードさんは殃濱榎なんですね？」

「殃濱榎？」

「はいっ、傷を治したり、遠い距離を転移したり、雨雲を呼び寄せたり！」

……ふむ、科学的な話ではなさそうだな。「殃濱榎＝魔法使い」くらいに置換しておくか。

しかし、中世ながらの鉄製武具に、魔法などというファンタジーまで存在するとは……いや、逆にそれくらい物理法則を無視する『超理』があつたほうがまだ今の状況は説明できると言つものか。

「いや、違うな。俺はただのワーズワードだ」

「普通の人にはみえませんよ？」

「確かに耳は長くないがな」

「み、耳の話題からはもう離れてください！」

いい反応である。

このネタはしばらく引っ張れそうだ。

「その無邪気な微笑みが逆にこわいです……あの、じゃあ、これからどこへ行かれるんですか？」

「正直決めかねている。この場所にいる理由も実はわかつていらないんでね」

「じゃあ、お国に帰られるんですか？」

……それには即答できない。

帰る　　帰ることができるのか。

帰れたとして、俺の肉体は今頃、拘置所の中だらう。

いや、その思考にも破綻がある。

今ここにある肉体はネットで使っていたアバターの姿ではない、生まれ育った俺の姿だ。

肉体」と転移したというのなら、あれだけの完全包囲を敷いておきながら、俺を取り逃がした日本警察とＳＴＡＲＳは、今頃ネット上で大いに笑い物にされていることだらう。

その祭に参加するためだけに、帰りたい気持ちはある。

だが、現時点での方法はわからず、そもそも肉体」と転移したとこう発想も違和感がある。

肉体」との転移であれば、それは神隠しとも言ひべき、可能性コンマ以下フォーナインの世界だ。

自室で、あのタイミングでそれはありえないと考えて良いだらう。俺の計画のどこかにバグがあり、その結果が今の状況につながったと考えるべきである。

しかし、現時点では完全に情報不足だ。

「……帰りはしない。仮に、それを目的にするにしても情報がたりない」

「情報、ですか」

「ああ、もつと情報がほしい。会話はシャルのおかげで、多少できるようになつたが、現状認識が正確ではなければ、必要な情報の取

捨選択ができない。この地の人間がどれほど文明レベルを築き、どのような生活をしているのか。シャルの言つ魔法使いとやらにも興味がある。もっと情報の集まる場所へ行きたい

「な、なるほど。難しい話なのですね」

……理解を放棄してまで、無理に相づちを打たなくともよいのだがな。

「……あー、村とか町、そういうた人の集まる場所に行きたいとうことだ」

「あ、それなら行き先は一緒です！」

弾んだ声。初めてあつた相手になぜこれほど気が許せるのか俺には謎だ。

「……、ニアヅ治林を超えれば、『愈酒釀臺』はすぐですし」

愈酒釀臺＝ユーリカ・ソイル。

新しい単語である。文脈を考えれば、土地の名前か国の名前だろう。

「『ユーリカ・ソイル』はこの国では一番目に大きい街ですし、その情報つていうのも売ってると思いますよ」

「いや、買うものでは……いや、買つ場合もあるか。そこまで同行してもうえると言つことか？」

「はいっ、もちろんです！」

耳がピタピと激しく上下する。

自分が、人の役に立てることが嬉しくてたまらないといった様子だ。

喜びを隠しもしないその姿は、俺に若干のとまどいを与える。

高度にネットの発達した現代において、人は知識に、感情に、無知ではないられない。

ネットを利用するものが無知であるのは、リスクである。単なる無知は蔑まれ、更なる無知は攻撃され、金を持つ無知は喰い物にされる。

結論として、アホはネットを使うなということだが、生活から切り離せない以上、人はどうやっても清濁併せ持つネットに適応しなくてはいけない。

血の全てをさらけ出すのはアホのすることだといったのはもつ常識である。

まず疑う、必要以上の情報を出さない。明るく振る舞うのも、バカをやるのも、ネット上に自分で作り上げた人格であり、それは純粋さとはかけ離れた、計算されたものだ。

だが、シャルは違う。

俺は何一つ彼女に信用されるような言動を取っていない。

『相手を信用することが人間関係の始まりです』

そんなコミュニケーションは地球では絶滅している。

全く……ここでは地球の常識は通用しないのではないか。

この地は確かに、異世界であった。

「ユーリカ・ソイルまではまだかかりますし」

ネット上に復元されるべき俺の魂が、この異世界に飛ばされたことは、自分の能力にマイナス評価を与えるべき、計画の失敗ではあるが、

「もひとつ色々お話できますね？」

シャルの笑顔を見ていると、その全てが失敗ではなかつたと、そう思えるのも事実だつた。

俺の今居る場所は、ニアヴ治林という場所であり、直近の街ユーリカ・ソイルには日が沈むまでにつけるらしい。

ちなみに固有名詞については、自分で理解しやすいようカタカナ表記できるレベルに脳内意訳しているので、厳密な発音としては正確ではない。

シャルに話す際には、このけらの言葉にエンコーデしなおして発声しているため、そこでの意思疎通に問題ないというわけだ。

相変わらず、まとわりついてくる光の粒がうつとおしい。

シャルは、自分に見えないものが俺には見えていることに、不思議さを感じてはいないうだ。

シャルにとっても、俺は異なる文化圏から来たよそ者である。異文化交流で相手を否定せずありのまま受け入れられるのは、知性が高い証だ。

剣やら鎧やら、ぱつと見の文明レベルは低そうだが、この世界の教育レベルは案外高いのかもしれない。

それとも、シャル個人の資質に由来するものだろうか。

「少し時間を取つてしましました。急ぎましょ、うか
「諒解した」

申し訳程度だが、縁石が敷かれた小径。

歩くことには難はなく、かつながらかに下る道なので、体力に自信

のない俺でも大丈夫だろ？。

歩き始めた瞬間、道の前方で、ただ漂つて いるだけだった光の粒の動きが乱れた。

思わず立ち止まる。

「どうかしましたか？」

「……いや」

10つの大きめの光の粒が一定間隔を置いて、空中の固定される。そして、光の粒が弾けた。

「くつ
「あや」

眩しそこ、思わず目を覆つ。この光の爆発はシャルにも見えたようだ。

直後、声が響いた。

「 そこので留まるがよい」

目の前に、唐突に、巨大な一匹の虎が出現していた。

物理法則をあざ笑うかのようなその出現は、全く持つてファンタジーである。

「あ、あ、あ」

シャルの顔からは既に血の気が引いている。ぺたりと腰を抜かし、耳は降伏の証のように垂れ下がっている。

少なくともそのお腰に付けたアイアンソードの出番はなさそうである。無駄な抵抗的意味で。

……しかたない。

俺は一步踏み出ると、シャルを後ろに庇つよつてその生物と対峙した。

「ほう、お主は恐れんのか？」

虎が、くつくつと騒う。

四肢をついた状態で、その口の位置は俺の頭を越えている。立ち上がりれば、4メートルは軽く超えそうだ。

「……逃げない理由は二点ある。一点は、お前が言葉を喋れるところだ」

「ほう」「ほり

「わざわざ姿を現し、声をかけてきたところは、俺達に即座に危害を加えるつもりが無いということだ」

俺の言葉に、眞実は半分ほどしか含まれていない。実際はこのような化け物と言葉が通じるからといって、それがそのまま安全であるとは考えていないからだ。

「くつくつくつくつ、我的姿を見て、恐れぬ理由がそれか。ではあとの理由はなんだ？」

なおも騒う虎。

「安全と判断した、一点目の理由、それはどういひもの虎は張りぼてであるようだからだ。」

……声は確かに目の前の虎が発している、よつに見える。
だが、俺の目には、虎がリアルな立体影像にしか見えないのだ。
先ほど弾けた10つの光点は、虎の額、口、首、背、手足、そして尾の位置でいわば星座のように、今も輝いており、それが虎の皮を被っているだけにみえる。

実体のないものを恐れる理由がない。
そして、さらにもう一つ。

俺は、虎の更に後方、背の高い木へと視線を延ばす。

「 ツ、 貴様、 どこを見ている! 」
「 ひつ! 」

シャルの小さな悲鳴。

俺の視線に気付いた虎が威嚇する。が、その行為自体が、墓穴である。

俺の考えが正しいことを裏付けるだけの行為だ。

そう、俺の見る先、木の高い枝に俺やシャルのような光の粒が集まっているのである。

そして、そこから、糸を引くように光の筋が虎へとつながっている。

「 一 点目は飛ばして、三 点目だ。……自分の姿を現さず、裏に隠れてい るような相手を恐れる理由がない 」

「 なんだと 」

俺の視線は既に虎をみていない。

「冷静に行こう。そちらの意図は知らないが、少なくともこちらで敵対の意志はない。話がしたいなら姿を現せ。それでこそフェアといつものだらう?」

……これもまた半分は真実ではない。
有利に交渉を進めるには己の位置を明らかにするべきではないからだ。

だが結果、相手が姿を現さうと、隠れたままだらうと、どちらでも良い。

挑発を込めた俺の言葉に対する反応で、まずは相手のレベルを判断できる。

ボールを投げ、その反応を検証する。検証結果からより己に有利な結論へ到達すべく、相手を誘導する。

これもまた、ハッキングの手法である。

俺は危険を感じるより先に、新しい情報が増えることに喜びを感じていた。

ふいに、虎の口調が変わった。

「くつくつくつくーーお主、なかなかに面白いわなー！」

それは女の声であった。

ガサリと音を発して、木の上からそれが、飛び降りてきた。その身には、やはり光の粒がまとわりついている。想定通り、この光の粒は人間、あるいは生き物にまとわりついてくる習性があるのであるのだろう。

虎を左に従えるように降り立ったその姿は、

「……狐？」

「いと聴き汝に敬意を表し、我が身を顯そう。妾はこのあたり一帯を治める『ニアヴ』」

それは人の姿をした狐だった。

中世風のシャルと異なり、緩やかにそして大きく胸元の開いた布の衣装はまるで浴衣か巫女服か。

茶色く毛の生えた獸の耳、大きく太い尾。人語を話す狐の化生といえば、もうそれは決まっている。

「……九尾だと」

「九尾？ どこから見ても一本しか生えておらぬがのう。お主の目にはどのよう見えておるのじや？」

おひと、俺としたことが、つい口に出てしまつた。

「ま、まさか本当に、ニアヴ様っ！？」

「ふふん、無論じや」

「知つてゐるのか、シャル」

「は、はい。街や村を治める群兜様^{マータ}がいるように、森や山にはその

地を治める瀬獸様がいらっしゃいます

判然らない単語はマーキングしておき、後で解析するリストに加えることにする。

「瀬獸様の治める土地では、人は獸に襲われることはなく、交通の安全が保証されるといっています。お姿を見たのは、私も初めてなんですか？」

「深き山林は人の地ではない、故に侵すべからず。だが、人もまた神の嘉よみがしたもう子、故に見守りたもう。不侵の条約と引換に、交通を許可すると、ま、そういうことであるな」

得意げに、高らかにのたまわう狐の声。

なるほど、論理的な交換条件である。それでシャルのような少女でも一人で行動できるのか。

「汝らの名を告げよ

「あ、すみませんっ、私はシャル・ロー・フュルニーと申します！」

「……ワーズワードだ」

「ふむ、素直でよろしい。妾わたくしの田は、この山林の中であればどこまでも届く。お主らを見守ることもに、無法を働く者があれば、即座に駆けつけると言つわけじや。故に」

狐の化生　　ニアヴガ一端、口を開ざし、凝じつと俺の全身を踏みする。

「……お主は何者じや？ 強力な何かが進つたと思うたら、妾の治地に覚えのない人族が一人増えておるではないか。その上【リープ・タイガー／飛虎】に対して動じず、おまけに妾の存在に気付くとは……くつぐ、お主、さぞ名のある魔法使いなのであるうな

「ニアヴは、まるで興味深いおもちゃを見つけたかのようにならって笑う。

一方俺は、

「ふむ、数と大きさ、それに色にも共通点がないか。これでは判定基準にできないな。であれば、単純に光量をその観測単位とするか。どちらにしても正確な計測ができない以上、俺自身を計測基準100カンデラとして、相対光量を数値化」

「……は？」

全く別のことを考えていた。

「100からの相対比。シャル5カンデラ、ニアヴ30カンデラと言つところか」

やはり、俺の周辺だけ異常に眩しそぎる。

「だから、お主何を呟いてある！」

「お前が操つてている、この光の粒の話だ」

「光の粒？ なんじやそれは」

「……見えないならいい。少し待て」

「お主っ！」

ふよりと目の前を横切るそれを、手で払う。
ならばこれは一体なんなのか。

……一つの仮定は既に俺の中にある。

大気中に漂い、触れることのできない色とつづりの光の素粒子。
それは田の前の虎の姿のよう、コントロールできる代物である
らしい。

とすれば

「すまない、待たせた」

「お主、無礼なのが慇懃なのか、どちらなのじや？」

「その判断はそちらですればよ。先ほどの質問だが、俺は期待されている魔法使いという存在ではない。だが、その魔法とやらを使える可能性はある

「わからぬ言い回しじやな。結局の所どうなのじや」

「そうだな……その魔法とくものを使つてみてくれないか

？」

それで明瞭するはずだ。

「あの、ワーズワードさん。濬獸様はこの山林の守り神様のような存在です。なのでそういうお願いは……」

「だめなのか？」

「よいよ。妾は面白いものが大好きじや。見せろといふのなら、見せてやうではないか」

じゃれるように頬ずりをしてくる【飛虎】を撫でながら、ニアヴァが鷹揚に答える。

……あれは、実際に触れるものだったのか。実は危なかつたのか
もしれない。

単なる立体映像と認識してしまった時点で、まだ既成概念から抜け出せてはいけないようだ。

この地でのリスクマネジメントレベルをもう少し引き上げた方が良さそうである。

アヴがその腕を前方に延ばす。精神を集中していると思われる、数瞬の間。そして、

「 発火せよ【コール・フォックスファイア／狐火】」

それはまさに力持つ異界の言葉だった。

【フォックスファイア／狐火】

その発声の後、その掌の上で光が弾けると同時に、巨大な黄金の炎が燃え上がった。

炎は、キラキラと高く吹き上がるが、まるで熱を感じない。

「わ、きれい」

「ふふん、人族の使う炎とはひと味違うであろう。【狐火】は意志持つ炎。自然の木々を傷つけることなく、悪しきもののみを焼き尽くす我が族の秘術であるからな」

「は、はいっ。こんなにきれいな炎、見たことがありますん」

「ふふふん、そうじやろ？、そうじやろ？－ ワーズワード、お主はどうじや？」

白慢^ミ気に、とこつよりも、褒めて欲しいオーラを発散させてこちらを覗き込んでくる狐。

だが、その期待はスルーする。検証が先だ。

「ひつか？　【狐火】」

見よつ見まねで、握っていた掌を開く。

俺の掌中で光が弾けると共に、そこには狐の産み出したものと同様の黄金の炎が渦を巻いて燃え上がった。

「わ、やつぱりきれいですね」

「…………はああー？？」

一つの炎を忙しく目で追うシャル。

あんぐりと口を開けて、炎をみつめるニアヴ。

なるほど、やはり、そつか。

俺の仮定は正しかったわけだ。

「ばかなっ、なぜ我が族の秘術を使える！」「見せてもらつたからな」

「……技を盗んだというのかや」

「いや、それは少し違う。俺が見せてもらつたのは、魔法とやらの発動方法そのものについてだ。初めてにしては上出来だらうないわつ！」

「は、初めてじやと！？ ありえん……魔法とは、強大なる力。我ら狐族であれば一族秘伝、お主ら人の子たちとて、國や組織に管理されておるはずであらう！ 見たから使えるなどとこいつものではないわつ！」

その勢いに押されるように、シャルが素早い動きでうなづく。
説明責任はないのだが、要望通り魔法を見させてくれたのだから、こちらもある程度の情報開示は必要だと判断する。

逆に言えば、ここで秘匿するメリットもないといふ判断だ。

「それを説明するのはやぶさかではないが まず前提として、さつき一人に聞いた『光の粒』について話しておこう。一人には見えていないと、この林の大気の中には色とりどりの光の粒が漂っている」

「光の粒じやと……？」

とまどい様にキヨロキヨロとあたりを見回す狐。まあ見えないのだろう。

「そして、この光の粒は生き物にまとわりついてくる性質があるらしい。それはシャル、そしてお前の二人とも同様だ。木の上に居るお前に気付いたのもそれだ。なにせ光っているからな」

「はあー!？」

それで、気付かない方がおかしいというものだ。

「ここの光の粒がなんなのか、始めは俺にもわからなかつたが、先ほど見せてもらつた『魔法』 それで確証を得られた。これは『魔法』の発動に関係している」

それが俺の出した第一の仮定だ。

「……聞かせてもらおう」

身を乗り出すように、食い入つてくる狐。シャルの耳も、その一言一句を聞き逃さまいとピンと立つてゐる。

この目は俺にも覚えがある。新しい知識への期待、知らないことを知る欲求、それは世界が変わろうと、普遍的なものであるらしい。のそれは黄色。顎にあたる部分が赤。残りの支点が白い粒だ

俺はそれを一点ずつ指で指示する。

二人は、頭に疑問符を浮かべながらも、それを目で追う。

もちろん見えてはいないのだろうが。

「次に、実際に見せてもらつたこの黄金の炎。火種部分に『それ』が4つ使われている。基底に赤、赤、赤。頂点が黄色の三角錐の形につながっている形だ。お前の手のひらの上で三角錐の形をなした光の粒が、魔法発動の言葉により、発光し、炎に変化、つまり魔法と呼ばれる現象を引き起こした。それが俺の観察した内容だ。つまり魔法とは、この光の粒の組合せとその発動の一点がトリガーとなり発動するものであるのだ」

「こまでは、単純な理論と観察の積み重ねである。
二人の反応を待つことなく、先を続ける。

「そしてこの光の粒、ただ手を伸ばすだけでは触ることはできないが、邪魔だと思えば、払うことはできた。そこから何かしらの意志を持てば、コントロールできる存在であることが判然る。光の粒を見えないお前や他の魔法使いとやらは、見えないなりの修練や経験則でコントロールしているのだろうが、その動きが見える俺は明確な『光の粒の操作』でその三角錐の形を作り出すことができたというわけだ。結果は見ての通り」

更に言えばその発動におそらく『発声』は必要ない。『発声』の裏にある魔法発動を『念じる』部分のみが必要なのだと思われる。これもあとで検証を行うことにする。

愕然とするニアヴ。

「魔法が光の粒！？ あ、ありえん……」

「よくわかりませんが、すごいですっ！ やっぱりワーズワードさんは魔法使いだったんですねっ！」

「違うと言いたいところだが……一回とはいえ、実際使えたわけだ

から、否^い定はしないでおいた

『ウイザード』という異名もまた、ハッカーとして拒絶すべきものではないしな。

「じゃが……いや、それでは説明が……」

ぶつぶつと、何事が亥いている狐はとりあえず放置でよことして、この【狐火】である。

折角出たのだから、その威力は知りておきたい。

一本の木を照準し、炎の中でぐるぐる回る三角錐にターゲットを燃焼するよう『念じる』。

三角錐がそれに反応、炎が大きくふくれあがつたかと思つと、ターゲットに向かい、一直線に飛行した。ふむ、我が事だなら、すごいものだ。

劫ツ、とまるでナパーム弾の様に、炎が粘性をもつて木に巻き付き、その芯から焼き尽くす。

そういえば、巨大な本物の炎、いつこつたものを見るのも初めてだ。ネットで火山雷や流れる溶岩の動画を見たことはあっても、やはり目の前に見る本物の炎の圧倒的な感動は別ものだ。

「おお、よく燃える」

「ハツ！　くおおお、お主、田を離した隙に何をやつとるんじやー！　他の木々に燃え広がつたらどうするー！」

「そうだな。すまん」

「すまんではすまんわー！　降下せよ」

狐が慌てて、別の魔法の準備を始める。

俺は、そこに集まる光の粒の動きを冷静に窺う。

見るべきは光の粒の動き ニアヴにまとわりつく光の粒の中から、青×3、白×3の光の粒が集められ、六角形が形作られていく様が観測される。

「【ホール・ウォーターフォウル・レイン／降鶴雨】！」

発声と同時に、光の粒は六角形を拡大させつつ、燃えさかる木の頂上に広がり、そこに極地豪雨を降らせた。

火勢は途端に弱まり、一面を水たまりに変えて、やがて木の燃焼は完全に消し止められた。

【降鶴雨】 単純明快に大量の水を産み出す魔法と認識する。質量保存の法則に当てはめられないこの現象はまさに魔法だった。

……これで火と水には困らなくなつたな。

狐が不承不承という様子でこちらを向き直る。

「……信じざるを得ぬか」

「無理に信じる必要はないぞ？ どうせ見えないのだらつ」

「そういう問題ではないわ、阿呆めつ！ お主が今言つたことは、神の不在証明と同じじや！」

「神？」

「え、えつとですね。私は魔法のこととは詳しくありませんが、例えば火の魔法は戦女神・熙^{カグナ}? 碎様に授けていただくという話を聞いたことがあります」

「我らの神は人のそれとは違つが、どちらも同じ神が名前と姿を変えたものだと言われておる」

魔法のある世界にも神はいるらしい。
人間とはよくよく偶像崇拜が好きな生き物だ。

「だが、事実だ」

「それが危険じゃとこいつはあるー…………お主、下手をすると『世界の敵』になるぞー。」

「…………」

「せうじゅ、よく考えることじゅ」

俺の沈黙を、都合良く受け取つたらしい狐がつむつむと大きく頷く。

「光の粒とやらの話。それは危険じゃ。異質な考えを持つ者は必ず排斥につながる。お主が何者かは知らぬが、その力、他の者には隠すべきであろう」

「あ、それでしたら、逆に服装を魔法使いらしくしたらいりますか。それなら魔法を使っても特におかしく思いませんし」

「おお、その方がイザという時にボロが出ぬかもしけぬな、こういふのははどうでありますか」

「

どに意気投合する要素があつたのかわからないが、嬉々と対策を上げていくシャルとニアヴ。

輪の外で展開される会話。だがそれらは全くの無価値である。

「盛り上がりついている所悪いが、俺は俺のできる全てのことを自重するつもりはない。神の不在証明？ そう思いたい者は思えばいい。

俺は魔法と神とは、無関係に存在することを証明しただけだ。魔法以外のもので神の存在を証明すればよいだろう。もし俺が再び『世界の敵』となるとしても、それは俺が世界の敵になるのではない。世界が『俺の敵』になるということだろう。「

「ふたたび？」

「いや、もうは言つがな。妾はただ、お主のことを心配してじやな」

「

……同じだ。地球もここも。

「違うな。お前が心配しているのは俺ではなく、自らの安寧だ。俺が自由に振る舞うことにより、自分の生活に生じるトメリットを計算しての結果だ」

「なつ、そんなわけなかろいっ！」

俺は、怒りをも発するその獣の光彩を正面から見据える。

「……ならば、なぜ眞実を隠そうとする？なぜ己のできることを抑制する？血の可能性を塗り潰し、群れに紛れ、誰でもない名無しのワーズワードとして生きる提言は本当に俺のためか？」

「そ、そつ言つわけではない。お主のいう魔法の原理とやらは、この世界に大いなる混乱を産み出すと言つておるのじや。それを望むところのかや」

「それもまた違う。お前の言つ『混乱』、それは『改革』といつべきだ。この世の成り立ちたる自然原理が一つ明らかになり、それにより古い常識が一つ失われるだけだ。それを拒むお前の発想は変化

を嫌つた保守といつ知の『今』の引き延ばしに過ぎない

ぐつ、と言葉を飲む込む狐。俺の指摘を理解するだけの知性はあるらしい。

シャルにも何かしら琴線に触れる部分があつたらしい。今までにない真剣な瞳で話を飲み込んでいる。

音の消えたかのような濃密な沈黙。

十分に沈黙が浸透したことを確認した後、俺は言葉を続けた。

「……だから。もし俺の為だと言うのなら、俺の行動を制限する方向ではなく、俺の行動をサポートする方向で力を貸して欲しい。シャル、君に逢わなければ、言葉もわからず。ニアヴ、お前に逢わなければ、魔法とはなにかも知ることのできなかつた身だ。何も知らない俺には君たちの助けが必要だ」

言葉の通り、俺は自分にできることを自重しない。

今の俺にできることは、一人に助力を請うことだった。

Wrap World 10(後書き)

一話5分だと話数だけ無駄に増えそうなので、一話の分量を変更しました。

まだまだ、俺が一人で行動するには情報が足りていないのが現状だ。

俺はまじうことなき流浪者であり、今一人で行動するリスクは、死に直結するものだ。

「もちろんですっ！……私は魔法のこととか、神さまのことはよくわかりません。ですが、さっきのワーズワードさんのお話は、あの……その通りだとと思いました！ できることがあるのに……それを諦めて、自分を押さえつけるなんて、確かにおかしいと思いません！」

「…………ありがとう、シャル」

心強いうなづき。……彼女にもなにか抑圧された経験があるのだろうか。

未だ難しい顔をしたままのもう一人に向き直る。

「俺たちをこのまま通してくれるだけでも良い。行く先はコーリカ・ソイル。このまま別れれば、迷惑をかけることもないだろ？」「…………」

「…………」

是と否とも取れない唸るような返事。

先ほど俺が語った『魔法の原理』、俺だけが見えるという『光の粒』。それは、どうやら非常識なものであるらしい。その上、魔法というものをまるで無自覚に発動させる俺という存在を、同じ魔法の使い手であるニアヴは、そうそう無視できないのだ。

今の一アヴの感情を一言で言えば迷い。

責任と不安。危惧と興味。風さえ吹けば、どうにかとも倒れる弥次郎兵衛である。

つまりそれは 全ての決定権が俺にあることと同義なのだ。

一步。二歩。腕を組み、思考に深みに嵌り込んでいの一アヴは、俺の接近に気付かない。

三歩。その形の良い顎に右手をすっと伸ばし、グイと少し強引に上を向かせる。

「ふあ！？ な、なんじゃつ、いきなりつ？」

その大きく見開いた目が左右に泳ぐ、顔を背けようとするが、俺はそれを逃さない。

逆にぐつと引きつけ、瞳と瞳を固定する。
その近さに狐の頬がさつと朱を帯びる。

「迷うくらにならば 一アヴ、お前は俺についてこい」
「いやあ！？」

それは純粹に驚きの声なのだろう。

尻尾がぶわっと太く逆立つ。

後ろで少女の「きゃー」という黄色い声が聞こえるが、完全に無視する。

「な、なにを言って？」

「人と人の出逢いには必ず意味がある。出逢つべくして出逢った。
それが今だ」

有無を言わせぬ断言。

正確には、ただの出逢いに意味などない。意味を付けることがで
きるだけだ。

このセリフのよう。

「お前には強い力があり、高い知性があり、誇る美しさがある。だ
がそれは、観測する者がいて初めて認識されるものだ」

「わ、妾が美しい？ ま、まことか？」

……反応するところが想定と違ったが、とりあえず肯定しておぐ。

「森の生活は退屈だったのだろう？ それはお前を観測する者がい
なかつたからだ。お前にはお前を観測する誰かが必要であり、俺も
また同じだ」

「な、ななな」

「だから、俺についてこい。それがお前の運命だ」

ちなみに、『運命』という言葉を口にする人間は、アクターか詐
欺師のどちらかである。

そのキーワードを出たら、その相手は軽々しく信用しない方がよ
い。

「……妾は濱獣じやぞ？」
ルーヴィア

「関係ない」

「お主のことを危険だと断すれば、寝首を搔くかも知れぬ」

「本望だ」

全ての言葉を否定する。

この場で即座に死ねと言われたとしても、俺はそれを肯定しただ
ろ。つまり、これは俺にとつてそういう意味しかない会話だ。
だがニアヴにとつての意味は別。

「高い」と、朱色の支配面積が増えていく。

「妾を敬うことも罪れることしない者など初めてじゃ……」

「それが俺だ」

「……ワーズワード。お主、本当に何者なのじや？」

「それこそ自分の目で確かめればいい。俺についてくれば、きっと、おもしろいぞ」

「さあ、さあつい……」

手の力を抜き、その身体を解放する。

一瞬名残惜しそうな表情を見せたニアヴだが、次の瞬間には驚異的な跳躍力で身を離した。

「…ふ、ふん！ やはりお主は危険な男じやー。」

「否定はしない」

背を向け、腕を組み、フンと鼻を鳴らしす仕草は、昔何かのモンテンツで見たことがあるようななじよつた。

「ふふふ、じやがー！」

振り返ったニアヴが吹っ切れた笑顔を見せる。

「じゃが、妾は面白いものが大好きじや！ ワーズワード、お主は面白い。非情に面白いぞ！ よからづ、お主について行ってやるつではないか！」

「そうか。助かる」

扱いやすくて、本当に助かる。

質の良い情報を得るために、質の良い情報源が必要だ。

シャルの知識が世間一般レベルであるのなら、魔法といつものは、一般人が扱うことのできない特殊技術だということになる。

となれば、次に同じく魔法の知識を持つ者に出会える可能性は、かなり低めに設定せざるを得ない。

この身にまとわりついてくる光の粒、これが魔法の源であることは理解したが、それを独自に調査研究していくには、どれだけの時間が必要となるか判然らない。

ニアヴの協力は、俺にとつては不可欠なものであった。

そのために最も有効であると思われる手を、手段を選ばず使わせてもらつた。

手垢が付きまくつた泥臭い芝居ロールプレイは、我ながら鳥肌ものだったが、結果が出せたので良しとする。

運命の出逢いを演出する過程で、狐になにか別のことを勘違いさせたかもしれないが、誤解を解くのはのちのちでよからう。

話がまとまつたのなら、これ以上のタイムロスは不要である。

「さて、聞きたいことば」の地の木の数ほどあるが

「あ、あははは」

「勘弁してくれやれ」

「まずは目的の街へと向かおう」

「はいっ」

「ふむ。コーリカ・ソイルか……考えてみれば人族の街に下りるのも久しぶりじゃな

「街は嫌いか?」

「くつくつくつ、とんでもない、大好物じゃー どんな面白いことが待つておるのかの?」

「……それは重畠」

「ニアヴは、巨大な青い虎に飛び乗ると、手招きをした。

「ああ、乗るがよい。【ロープ・タイガー／飛虎】の足ならば、あつと言ひ聞じや」

「乗つていいんですかつ？」

それを肯定するように、飛虎はぐるぐると小さく唸ねて、シャルが乗りやすいように、腰を下ろした。

先ほどの虎の言葉はニアヴが遠隔で喋っていただけなのだろう。たとえ言葉が喋れないとしても、この虎に生物としての思考があるというのなら、それを一瞬で創り出す魔法とはすごいものだ。完全なAIは科学の極みにある地球ですら、未だ存在していないところだ。

「あ、ありがとうございます、飛虎ちゃん」

「ぐるるー。」

「あぶみ鑑くわも鞍くらもないだと……振り落とされないだろうな……」

「くふ、心配であれば、妾の腰にしがみついておつても良いのじやぞ？」

「それは遠慮する」

「即答ー！」

「や、シャルは俺の前に。後ろから支えよつ

「はー、えへへ……」

「くつ、もうよいわ！ 行け、飛虎よー！」

「ぐるるー。」

まだベストの体勢が決まっていないのに、疾走を開始する飛虎。

「うふふ、お、おおおおおおー。」

三人と一匹は、情けない悲鳴を尾と引く、一迅の風に変わった。
次なる舞台には一体何が待ちかまえるのか。

そして、ワーズワードの冒険は続く。

Warp World 11 (後書き)

区切りがいいので、JREでHaxeおわづつ

深緑の中を、まるで風の通り道でも進んでいるかのような速度で駆け降りる。

なだらかに下る林道は、適度な明るさと翳りを持っており、縁の滑り台に乗っているかのような不思議な爽快感があつたが、山を下りきった地点でそれもついて切れた。

ザア……と、葉の擦れ合ひ音とともに、一気に視界が開ける。

遙か地平線まで見渡せる開拓された平野は、見事な縁の田園風景であった。

もちろん、地平線といつても所詮は 10 km 程度先にある丘陵まで、という理解になるが、それでもその $10\text{ km} \times$ 視界いっぽいの縁のパノラマが全てが農地であるとすれば、それは広大といつても過言ではない。

道幅も一気に広がりを見せ、そこに残る轍のあとが、移動手段または農耕用としての牛馬の存在を知らしめる。

つまり、この世界は魔法という超理やニアーグという獣の化生の存在があるものの、基本的な人々の生活は農耕を基とした、地に足のついたものなのである。

「見てください！」

飛虎にしがみついていたシャルがまっすぐ前を指す。

並びはニアヴ、シャル、俺の順。

俺が後ろから抱きしめる形であるため、シャルの腕は、俺の身体の下から一コツと出てきたような感覚である。

その指さす方向、地平の丘陵に人工物の姿があつた。近づくほどにその高さが露わになつてくる。形としては、尖塔。日本風に言えば物見櫓であろうか。そのような建造物が道の左右に一本ずつ建つてゐる。

「あれは？」

「ヨーリカ・ソイルの塞疫臺カラソイルです！」

もちろん、その説明だけでは意味を得ないが、これまで蓄積された脳内データバンクを検索し、即座にその意味を類推する。

まず臺ツイル単体で『門』を意味することは、既にわかっている。

次に、『塞疫』（カラ）であるが、同義発声である『寒』が『翼・羽』、『役』が『赤の色名・熱』の意味らしいので、そこから更に類推し『塞疫』の意味は『飛行するもの』『赤熱した』であると仮定できる。

『飛行するもの・赤熱した・門』

最後にそれをより自分にわかりやすい日本語に『コードすれば

「『朱雀門』か、立派なものだな」

全ては一連の会話の流れの中で同時、もしくは並列解析を行つてゐるので、思考から発声までのタイムラグは微々たるものだ。

「夜になると、塔の先に明かりが灯るんです。すごいきれいなんですよ」

「ヨーリカ・ソイルの名物の一つであるな。それも楽しみじゃが、ヨーリカ・ソイルと言えば、やはり『アンク・サンブルス』が一番じやろうな」

「あつ、私も大好きですっ」

『アンク・サンブルス』なるものを知らない俺はその会話には混ざれないが、まあ楽しみにしておこう。新しい情報を得ることはなんであれ、重要である。

『朱雀門』を目前に、左右から更に太い道が合流した。
道行く人群が目につき始める。

馬車や荷車に混じって歩く、革鎧姿の旅行者だか冒険者だかが激しく目立つて見えるのは、俺がまだこの現実を受け入れ切れていないからだろうか。

彼らの顔を見ていると、男女ともにやはり、耳が長い。肌の色はシャルほどの白さを持つ者はおらず、みな健康に日に焼けている。髪の色は様々である。

同じく、シャルほどの美しさをもつ美男・美女は特に見受けられないようだ。

この世界の人種全てがシャルやニアヴ準拠の美男・美女オンリーで構成されている可能性もあったので、これも世界を知るにあたり十分有益な情報であろう。

もし全員が美男・美女であつたら、必然的に俺は世界最悪の醜男ということになるので、よかつたかもしけない。

いや、客觀の評価では、十分標準レベルだとは思っているが。受け入れがたい現実から目を背けた、自己正当化ではないぞ？

シャルが、なにやら言ったそつた視線を向けてくる。またか心が読まれたわけではないだろうが、その視線に一瞬どきつとす。

「……どうした？」

「私たち、田立っちゃつてますね」

「……あー」

既に速度を落としている【ロープ・タイガー／飛虎】が、一步步進めるたびに、ひつとう声と共に目の前の空間が空していく。なるほど、やけに顔の善し悪しがわかると思つたら、みな一様にこちらを振り向くものだから、観察ができていたのか。

「くふふっ、田立つて当然じゃー、なにせ【飛虎】は我がつ」

「一族秘伝の魔法なんだろう。それはいいとして、そろそろ降りて歩くとしよう」

今まで言わせず、巨大な虎の背から飛び降りる。

なにやらわめいているニアヴを完全にスルーし、シャルに手を貸して降りしてやる。

「くつ、まあいこじやうひ。どのみち街に入るには足税の支払いがあるじやうひからな。飛虎に乗つたまあとうわけにはいくまい」

「足税？」

俺の疑問に、シャルが答える。

「えとですね、街の入門には通過税がかかるんです。人は足が一本なので、一人100^{ジット}です。馬や牛は足が四本ですから、200ジットになります」

「人の方が安いのか」

「馬や牛は、沢山の荷物を運べますから」

なるほど、そういう計算になるのか。

「六足馬なら足が六本なので、さらに高くて300ジットになります」

ふむ、西洋系にアジア系、おまけに北欧神話まで入ってきたか。
四面四角論理思考の俺には、ここは耐え難き混沌ファンタジーの大地なのかも
しない。

「ちなみに100ジットについては、どれくらいの価値なんだ?」

「どれくらい、ですか?」

「そうだな、平均的な宿一泊の値段や、一食分の食事の値段だとい
くらになるのか、という話だ」

「あ、それなら。コーリカ・ソイルですと、一泊食事付きで80ジ
ットくらいが相場です」

その宿をビジネスホテルレベルと考えて約8000円と計算する
と、1ジット=100円。足税については日本円換算で約一万円程
度という理解をしておく。

「足税というのは、思つたよりも高いものだな」

「なにをいうておる。街に入るということは、安全が保証されると
言つ意味じやろ? 安全が100ジットで買えると考えてみよ。群
れることにより外敵より身を守る、人族が作りだした見事な安全保
障の仕組みじやと、妾は感心するぞ」

狐の言には一理がある。

「前言を撤回しよう。安全はタダではない、その通りだな。教えてくれてありがとう」「アヴ」

「お主が素直に感じると逆に恐いものを感じるの」「……じゃがまあ、悪い気はせぬ。くふふふふ」

なにがどう作用したのか、にせにせしながら、俺の肩をぽむぽむ叩く二アヴ。

当然スルーするが。

「さあ、行こう」

「これ、またんかつ！ む、そのまえに……飛虎、よう働いてくれたな」

「あ、あつがとうござります、飛虎ちゃん。またねつ

「ぐるぐる

頭を撫でようつし、背伸びをするシャルの頬を一なめすると、飛虎は空へ向かつて大きくジャンプした。

飛虎の身体を構成する一つの『元素』がその接続を失つ様が見て取れる。

そしてその姿はすつと、宙に溶けるように消えた。

W a n d e r i n g w o n d e r 01 (後書き)

一章開始です。登場人物が少し増える。

「『元素』？」

「いつまでも『光の粒』ではわかりにくいからな。魔法と呼ばれる現象の『源』となる『素粒子』、故に『元素』と名付けた」「その元素とやらが、お主以外の誰にも見えず、世に満ちておるというのか……」

俺の元素理論に対し、完全には納得していない——アヴが、青い空を仰ぎ見る。

「更にいえば、人にまとわりついている元素濃度は、個人差が大きいようだな。前の歩いている商人風の男には、殆どまとわりついていない」

「それはそうであろう。元素うんぬんの話は横に置くとしても、魔法を使えるオホとは、生まれついてのものじやろつ」「

「オホというよりも、単なる性質だと言える。元素を身に集める性質だ。魔法の素たる『元素』は大気中に遍く存在している。オホというほど本人性能に関わらないのではないだろうか。元素操る技術さえ身につければ、例え生まれ持つて元素を集める性質が弱くとも、それら元素を利用して魔法を行使することは可能だろつ」

「……魔法は誰でも使えるということか?」

「結論すればそなうる」

「お主に会つてから、妾の常識が野兎の如く逃げて行くわ……」

「言ひぐさだな。あの場で全ての常識を捨て去つたのは、俺の方が先なのだが」

全く持つてお互い様である。

「ワーズワードさん、もう見えてきますよー。」

と、そこまで会話に入つていなかつたシャルが前方を指さし、歓声を上げる。

「ああ、俺も見ていた。すごいものだ」

要素についての考察も深めたいところだが、まずは目前に迫つた『それ』に、俺の興味は移らざるを得ない。

「はい、これが朱雀門ですっ」

まるで我が事のように胸を張るシャルの姿に、俺は思わず苦笑を漏らす。

とはいえ、そう、確かにすごいのだ。

朱雀門　それは実際の所、門ではなかつた。幅が20mほどあり馬車数台が余裕ですれ違えるだけの大門、その両端に立つ円形の尖塔がそれである。中に入れる構造であるらしく、物見の窓がいくつか開いており、中に衛士らしき人影も見える。

一柱の朱雀門、陽を受けて赤光を反射する赤い塔と黒光を反射する黒い塔。仮に右を赤塔、左を黒塔と呼ぼうか。

見上げる高さは30mほど、10階建てマンションが丁度それくらいだ。

高層マンション群は見慣れている俺だが、他に同等の高さの建造物がない中に孤立する朱雀門は、実際以上の高さに感じじる。

そして、高きの話をさておいても美しい塔なのである。どちらの塔も、鏡面と言つても差し支えないほどに空や雲を反射している。それも金属光沢を持つ反射光だ。壁面には見事な彫刻が施されており、その纖細さもまた見事の一言に及ぶれた。

塔の左右には街を囲む石造りの街壁が並ぶが、こちらの高さは3メートルほど、頑張れば乗り越えられなくもない高さであることを考えれば、外敵を防ぐ役割はあまりなさそうである。せいぜい野生の獣の侵入を防止できるくらいだろうか。

ちなみに、朱雀門で徴税を待つ行列は歩行組と馬車組とに別れており、歩行組には一名、馬車組には四名体制で対応しているようだ。

俺たち三人は当然歩行組に並んでいる。馬車組を見るに、先ほど聞いた六足馬とやらは居ないようである。ちょっと見てみたかったのだが、居ないものは仕方ない。

歩行組はそれなりの列を成しており、俺たちの番が回ってくるにはもうしばらくかかりそうだ。

「遙か昔に滅び、今やその名も残されておらず『國の丘』が建てるものらしいの?」

「ヨーリカ・ソイルの街の名前はその頃からのものらしいんですけど」「じゃが、朱雀門という呼び名は新しいものじゃがな。今より更に昔には『宝石の塔』と呼ばれておったはずじゃ。各地に残る『潜密鍵』の中でも、特に有名であることには違ひないがの」

「『潜密鍵』?」

「えつですね、すこい昔に作られたもので、何の目的で作られた

のかどうやって作られたのか、今では作り方も判然らないものだとを『潜密鍵』って言つんです。他にも有名なものはいくつかあって、いろんな街の『潜密鍵』を見て回るのは、旅人の楽しみの一つでもあるんですよ」

弾けるような笑顔で、私もそれが楽しみなんです、と付け加える。
ちなみに『潜密鍵』は、言葉の意味を直接変換した結果の単語である。

前後の文脈から、よりわかりやすいよう『アーティファクト』として、脳内辞書に変換登録しておくことにする。

「この朱雀門も元々どういう目的で建てられたものなのか、全くわからないそうですし。ぴかぴか光ってる材質が、金属なのか石なんか、それすらもっていう話です」
「なるほどな」

それはそれとして。

「建立目的は判然らないが、とりあえず材質でいって、赤塔の方は、おそらくチタノヘマタイトで作られているな

とりあえず、全く判然らないわけではない。

「……んんん？」
「ちたのくまたいと？」

頭に大きな疑問符を浮かべるシャル。

「ああ、あの赤色の金属光沢は『酸化チタンを含む赤鉄鉱』『チタノヘマタイト』の特徴だな。空の雲を映すほど鏡面反射から類推すれば、希少鉱物である『酸化チタンの含有量は相当な量だろ』。宝石の塔と呼ばれていたのも納得の話だ。ちなみに黒塔の方も、含有量は同じくらいだな。ただ、主の素材が黒鉄鉱なのだろうから、その主成分は『チタノマグнетタイト』だと思われる」「にさんかちたん。ちたのまぐねたいと」

疑問符をつけることすら放棄したシャルが、いくつかの単語をただ音のみを拾つて復唱する。

「ただのメックキ加工であるなら、長い時間の間にはげているだろ」、そうするとやはり材質全てが、单一鉱物でできているのだろうな。なかなかに珍しいものだ

「待て待て待て！」

「……なんだ」

なぜか慌てた様子でぐいぐいと迫つてくるニアヴを、軽く押しのける。

「アーティファクトじゃぞ！？ その材質をなぜ語れる！」

そろは言われても、所詮はヘマタイトである。

『ヘマタイトネットクレス』といえば、ネット販売の招福グッズでは定番なので、見た目で大体わかるだけなのだが、さすがにそこまで説明するのは面倒である。

「たまたま知つていただけだ。单なる雑学だと思つてくれ」「ざ、ざ、ざ、雑学……」

口をパクパクさせる。「アヴ。

「私にはよくわかりませんでしたが、ワーズワードさんは物知りなんですね」

「まあ、これくらいならな」

素直な賞賛はありがたく受け取つておぐ。

「そういう話では、ありえんのじゃ―――！」

その声に何事かと振り返る歩行組の人々だったが、直後、面倒な関わり合いを避ける方向に思考が向いたらしく、特にそれ以上の反応はない。

俺は、キンと響く耳を押さえつつ、

「じゃあ、今のはし。俺は何も知らない

とその場を納めることにした。

面倒なやりとりは避けるに限る。

「はあああああ？？」

「さて、そろそろ俺たちの番も近づいてきたな。そういうえば、その足税というのを払えない人間はどうすればいいんだ？　金銭の類は一切もつてないんだが」
「あ、それでしたら私が」
「ま、待て待て、待たんか！」
「……まだなにかかるのか」
「当然である、なしつてなんじやー！」

「ないものはない。知らないものは知らない」

「通るか、そんな話！」

「そうそう、その門を通る話なんだが、さすがに金に関してまで世話になるわけにはいかない」

「そうですか？」

その驚いた表情から、シャルは当然のよつて、自分が足税を出すことを考えていたらしい。善良な子である。

「えっと、それでしたら税符を受けることになると思います」

「税符？」

「税金の滞納書と言つたほうが多いでしょか。当然税符分の金額を支払うことで償還できますが、そのお金のない人は、特定の労働で代償することもできるんです」

「なるほど」

「100ジット分の労働となると、結構きついと思いますが、……」

「問題ない。なんとかなるだろう」

ならなければ、その時はその時だ。

未来とは常に不定である。過去から現在までの継続があれば、未来はある程度の予測ができる。だが、過去と切り離されてここに存在する俺には、その予測がたてられない。であるならば俺の未来は完全なるプラスマイナスゼロの状態。

未来について、希望や楽観のプラス思考を持つ理由、不安や恐怖のマイナス思考を持つ理由のどちらもなかった。

「わかりました……がんばってくださいね」

シャルが俺を見つめ、激励をかけてくる。その瞳に多少含まれる尊敬の気配は、おそらく無償の好意を甘受しない俺の在り方に対する

るものだろう。

もつとも俺の判断は、日本古来のことわざに曰く『親しき仲にも金錢トラブルあり』という格言に従つたものであり、高潔な精神に基づくものではない。

その点について多少の誤解があるかもしれないが、シャルの認識はシャルだけのものである。俺がそこに訂正を加える必要はない。

漂う元素に乱れが生じた。

それを気配ではなく、目視でいち早く知る。

「無視」「

苛立ちを含んだその声の源から強い風が吹き付けてきた。

氣流の発生源は黄元素×1、白元素×7……ニアヴを中心にして円が、それぞれ逆方向に回転している。

「するでないわッッ！」

ひょいとサイドステップでその場を飛び退くと同時に、

バチンッ

と不可視の衝撃がその場を襲つた。

「あやあっ」

と、悲鳴を上げたのはシャルだけではない。

同様の悲鳴を上げた回りの数人が、ズザザッと一気に距離を取る。ニアヴと俺を中心にして、列が崩れた。

「いきなりだな」

激しい気流は、回転する源素が産み出しているのだが、それを見ることのできない者から見れば、ニアヴ自身が爆風を発しているよう見えることだろう。

「……妾もお主に着いて行くと決めた身じゃ。今後のために、一つ教えておいてやうつ」

その中心で、ニアヴが不敵に微笑む。

「妾は ッ」

カツと見開かれた獣の虹彩が、並々ならぬ怒氣を孕む。

それと同時に、これまで外に向け流れていた気流が、内側へとその向きを変えた。

「意外に ッ」

バツと天空に向け掲げられた掌に、激しい気流が渦を巻く。

その様子から圧縮された空気の塊を創り出しているのだと分析する。それを任意の場所で解放すれば なるほど、先ほどの不可視の衝撃波が生まれるわけだ。

その大きさ的に、先ほどのように、小手先の動作で躱す事は不可能だと判断する。

大きいなる不安を孕んだ衆人環視の中、怒りに染まつた狐の化生は、大きくその手を振りかぶり

「気が短いのじゃ―――！」

そう、大声でのたまわったのであった。

バチンツッ！

俺及び、俺の後方に退避していた哀れな商人風の男は、決して自身の身体能力だけでは実現の叶わない空中飛行を体験し それは時間にして数秒、だがその意外性のなさを実感するだけの時間は十分にあり その後、重力に引きずられるだけの不自由な落下を味わうことになった。

門のすぐ傍だつこともある。騒ぎを聞きつけた衛士たちが何事かと、駆けつけてきた。

衛士の数は、10人。徵税を行つてゐる人数はそのままであるから、詰め所から出て來たのである。

「一体何の騒ぎだ」

隊長らしき男が落ち着いた声で問いかける。

衛士たちが身につけた揃いの青い甲冑と、その手に携えた長槍は、一同を威圧するに十分であり、ざわめきが納まると同時に、皆の目が俺たち三人、とりわけ目立つてゐるニアヴへと向けられることがなつた。

「ブイツ」

俺をブツ飛ばしたことで一応の満足を得たらしいニアヴは、既に先ほどの氣流操る魔法を解いてゐる。そして、衛士たちの相手をするつもりではないらしい。

「あうあう

そうなると、次に皆の目はシャルへと向かうわけだが、彼女にこういった荒事の経験はないのである。完全に衛士の迫力に飲まれ、声を發すこともできなくなつている。

となれば次に皆の目は、もう一人の同行者に注がれ

「やれやれ」

その役目が回つてくるのも、当然である。

生まれたての仔馬のような体勢で転がっていた俺は、曲がってはいけない向きに曲がつていた首を元の位置に戻しつつ、

「ああ、すまない。もう嵐は去ったから、大丈夫だ」

その隊長らしき人物に対応した。

まさかここで、そんな軽口がでてくるとは思つていなかつたのであらう、ぽかんとした表情を見せる衛士隊長。

「おい、お前ふざけ

「あつはつはつはツ」

衛士の一人が、踏み出そうとする手を振つて抑え、その隊長は笑つて応えて見せた。

「それであるなら問題はない。だが、これも我らの務めなのでな。騒ぎの原因を聞かせてもらえるだろうか。なに、時間はとらせない」

公務をないがしろにするわけでもなく、人当たりも良い。話のわかる人物のようだ。

「私はルーケイオン群兜^{マーダ}のオルドという

加えてその身に纏う元素光量はおよそ2200ミリカンデラ、一般人のそれより数倍明るいことを考えれば、実力ありきでの地位なのだろう。

2・2カンデラでもよいのだが、ここまで新たに視認できた人々84名の元素数はこのオルドなる人物を除いては、みな1カンデラ以下の光量であるため、ミリの単位を導入せざるをえないという結論を得ていた。

それが魔法なるものに縁のない一般レベルであると考えた方がよいだろう。

今後街に入り、大勢の人を見ることになつても、眩しさで俺の目がぐらむことはなさそうだ。その点はまずは安心である。しかし、そうすると イレギュラーである俺の特殊性は差し置いても、30・000ミリカンデラ相当のニアヴ、5・000ミリカンデラ相当の光量を放つシャルは、ともに一般レベルの眩しさを超えていることになる。

ニアヴはともかく、シャルは

いや、いいか。今その疑問はさしおこう。

群兜というのもさきほどシャルからも聞き、翻訳^{デコード}を保留していた单語の一つだ。語感的に領主や支配者への認識置換を行う予定だったが、もっと軽い意味、リーダーや隊長といった意味で良いのかもしない。ルーケイオンというのは、まあこの青い甲冑で統一された守備隊の名称だろう。

先ほどの軽口は冗談にしても、この場での最高権限を持つと思わ

れるオルドからどの程度の恩恵を引き出すべきか、そのためには交渉案について、瞬時の検討を行う。

よし、これで行こう。

最も効果が高いと思われる状況を創り出すために、俺はまるで何気ないふうに、自己紹介を開始した。

「紹介させてもらおう、俺はワーズワード。連れの一人は、シャル・ロー・フェルーとニアヴという」

何気なく出した『ニアヴ』の名に、小さなざわめきが起こった。

「……三人連れというわけだな」

「そうなるな」

冷静を装つオルドの反応だが、俺にはその感情が手に取るようにならぬ。判然。

その視線は見ようとせずとも、どうしても『ニアヴ』に向かざるをえない。

相手の目を見て喋れ、とはよく聞かれる言葉だが、それは相手に対する礼儀としての作法ではない、自分の言葉によって引き出された相手の反応を確認するためのもの。

人の咄嗟の感情は脳に直結した目にこそ浮かび上がり、それは隠しがたいものだからだ。

もつとも、こちらの人間はその耳が感情に反応するのだから、目を見る以上にその反応はわかりやすい。

「では、続いて状況の説明を行おう」

すでに俺の言葉は、半分も聞いていないだろう。

ニアヴが自己申告の通り、あの林一帯を収める瀬^{ルーグ}獸とかいう地位を持つ狐なのであれば、もっとも近くに境界を接するユーリカ・ソイルの守備隊長が、その存在を知らぬわけがない。

だが、ニアヴ自身が街に下りるのは久しぶりだと言った通り、街の人間が、ニアヴの姿形まで知っているとは考えにくい。

俺の言葉の真偽を確認するまえに、まずここにいるニアヴ自身から目が離せなくのは道理である。

「……後ろが気になるようつだが？」

そして、もちろんそれは誘導の言葉である。

「あ、ああ、すまない。……確認までに問うのだが、ニアヴ殿といふのは、その……」

直に聞いて良いものか、その迷いが透けて見える。
想定通りの反応で大変わかりやすい。

「もちろん ニアヴ治林を治める瀬獸本人だ」

それは、この場にいる全ての者に聞かせるがための宣言。

「ほ、本当に！？」

皆の目が、ニアヴへと集まる。

聰い狐のことだ、俺の意図に気付いているのだろうが、この状況でかつ全て事実なのだから、ここでは俺の言葉を肯定するしかない。

「……その野の囃へとおつじゅ」

不機嫌そうに、ニアヴが呟く。

『おおおおおお』

確信を得たゞよめきが、その輪を広げる。列を成す人々、オルドに従う全ての守備兵、その全ての日が、興味と驚愕に見開かれる。

だが、それこそが、俺の準備した舞台。その瞬間を逃さず、俺は場の支配へと乗り出す。

「静まれ ツ」

何者でもない俺が、ニアヴの名を負つことで、この場で最上段に位置する。

「深き森が人の地でないよう」、ニコド^{ルーヴァ}は瀧^{アマツ}獣^{アマツ}と言えども、ただの訪問者である。いたずらに立てるひとは『ニアヴ様』のご不興を買つ行為であると知れ

ニアヴの如の担い手としての振る舞い。

オルドを始めたとした、ルーケイオン一同が、その存在に恐れ入ったかのように膝をついて、頭を垂れる。

「はっ、考え至ら^{アリ}申し訳ござりません！」

「……オルド隊長、どうか頭をあげてほしい。それもまた『ニアヴ様』の望むところではないと、わかってくれるかな？」

上位に立った上で、同じ位置に下りていく。

「ははッ！」

上の者が下りてくるならば、自分は更に下りなければならぬといふ、被支配者思考が彼らを縛る。

封建思考とは、全くもってコントロールしやすいものである。そら、全員アホの子状態だった中世で、あれだけ封建国家が流行つたといふのもうなはずけるといふものだ。

「さて、そういうわけで、街に入りたいのだが、やはり『ニアヴ様』でも足税というのは必要なのかな？」

「いえっ、濫獣様にそのような！」

「それは助かる」

……自分でこの空気を作つておいてなんだが、本当に偉かつたんだな、あの褒めて褒めて褒めは。

そして、これもまた狙い通り。なし崩し的に俺の足税も免除である。

もちろんダメだと言われば、それはその時。うまく行けばラッキー程度の、トライアンドエラーの手法だ。

「ですが、ニアヴ様自らコーリカ・ソイルへ出向かれた理由について、お聞かせください。ルアン公への面会のご用でしたら、私からご案内させて頂きまーす」

新しい名前が出たな。そのラン公といつのが、街の支配者か。

「その時がくれば、声をかけて頂こう。だが今はまだその時ではない。……お忍びってやつだな」

「はっ、失礼致しました！」

俺の軽口にも、恐縮したとばかりの言葉が返ってくる。

狐の名前は、予想以上に効果があるな。

これはまだまだ利用でき……おつと。

それはそれとして狐のジト目が俺の背中に突き刺さる。
俺は背中の気配には敏感なのだ。

「さて、これ以上騒ぎが大きくなる前に通してもらつてよいだらう
か」

「もちろんです。まあこちらへ」

要人警護の如く、ニアヴと俺を囲むオルドとルーケイオンたち。
大きく手を振り、シャルを呼び寄せる。

「おーい、タダで良いそつだ。シャルも足税浮いたな
「あわわわわわ！」

なんてことを大声でつ、と言わんばかりにダッシュで駆け寄つて
くるシャル。

「い、いいんでしょうか……」

自分たちを取り囲む青甲冑が歓迎を示しているとわかつても、

やはり氣後れがあるらしい。

「向こうが不要だと言つたんだ。遠慮してどうする」

「お主……よくもまあ次から次へと」

呆れたようにニアヴが言つ。

「嘘はついていないぞ」

「あれだけ大見得を切つておいて、お忍びもなからう！」

「そこに気付くとは、さすがニアヴ様」

「どういう意味で言つておるのじや！」

キッと牙を剥ぐニアヴを軽く宥めながら、俺はこの世界で初めての人の住む街へと足を踏み入れた。

そこには、石造りを基調とした、そして俺の感覚では産業革命以前の時代を感じさせる街並みが広がっていた。

門を通つてすぐの場所は、倉庫街であるらしい。街の中心に向かつて伸びているのである。大通りの脇には巨大な鉄扉をつけただけの建物が並んでいる。

来るまでに見た広大な農地で収穫された農作物が保存されているのである。倉庫の数だけで流通規模を計ることはできないが、大まかに見積もれば、ここは1万人程度が生活する、中小規模の街なのである。

「中小って……ユーリカ・ソイルは『ラ・ウルター・ヴ』では一番目

の大きい街で、大都会ですよう

俺の感想を聞いたシャルが、嗜めるように呟く。

「そういうえば、国の名前を聞くのは初めてだったな。『北の聖国』^{ラ・ウルターヴ}というのか」

まるでどこの『田出づる國』のような大陸な国名である。

「『ラ・ウルターヴ』の名前まで知らないなんて……ワーズワードさんは物知りなのに、一般的なことは知らないんですね」

当たり前だわ。

「……そういうことだ。どんどん教えてくれると助かる」「はいっ」

元気な返事が返ってきた。

「ここで、足帳の記入をして頂く決まりとなっております。お手数だと思いますが、ご記入頂いてよろしいでしょうか？」

そこまで話していたところで、行軍が止まり、俺たちを先導して
いたオルドが、向き直る。

朱雀門の外側で、荷台と人物チェック、そして内側で足帳とやら
の記入を行うようだ。

「ん、そんなものがあるのかや？」

「ニアヴ様には失礼かと存じますが、これも街の治安維持の一環で
ございまして」

「ああ、よいよい。人の住まう地では人の法に、深山碧谷では濫獣ルーヴァ
の定めに従う。当然のことじや」

鷹揚に筆を取つたニアヴが長く連なつた巻物にさりさりと文字を
連ねる。

文字か

「や、お連れの方も」

同様に筆を渡されるが当然の事ながら俺は文字を書くことができ
ない。

むしろ街に入る大きな目的の一つが、この世界の文字を知ること
である。

発声からの言語コード同様、この国のアルファベットの文法・
法則性について、サンプリングさえできていないのだ。

「すまない。俺は文字の読み書きができない」

「は……え？」

俺の相手をする青甲冑くんの田にとまどいの色を見る。
まあ自分より、偉い人間が文字の読み書きができるなんて、思
わなかつたのだろう。

あの『ニアヴ様』相手に軽口を叩くような人間が、となれば一層
のことだろう。

もつとも俺はそんな相手の心情変化など気にしないのだが。

「代筆を頼めるだろうか？」

「はッ、もちろんです。日付その他については私どもの方で記入い
たしますので、お名前とユーリカ・ソイルへ来られた目的について
のご記入をお願い致します」

「名前はワーズワード」

「ワーズワード……ええと、ご家名はなんと仰るのでしあう」

「家名はない。ただのワーズワードだ」

「は、失礼いたしました」

「目的はそうちだな、観光とこいつにしておこしてくれ」

「はあ……」

彼の書く文字を田で追いながら、その場でアルファベットのチ
ックを行つ。

発声6文字の『ワーズワード』が、こちらの言葉では4文字。發
声音数よりも文字数が減つており、かついくつかの基本記号の組合
せで書かれる文字であるということは、漢字やヒエログリフに近い
象形文字系の言語なのである。ひ

であれば、大まかな象形（記号）の組合せさえ覚えれば、あとは

絵的な組合せから意味の仮定（解読）が可能になるだらう。文字の修得についてもあまり苦労はしなさそうである。

「以上です。どうも無事の滞在を
「ありがとう」

最後まで懲慄な態度を崩さなかつたオルドと別れたところで、シャルがふくええーと大きな息を吐いた。

「す、すいぐ緊張しましたあ～」
「なに、門なんてのは抜けてしまえば、もう他に接点はないだらう。
ところで
「はい？」
「い」の後の「い」とだ

俺としては商品、看板による文字学習。家屋造成、人間観察による文明度判定。食品、水道事情による生活レベル判定と、多數の目的がある。

一言で言つてしまえば、この街の全てが大きな知識の泉だ。なるべく時間を無駄にすることなく目的を果たして行きたい。

「あ、それなんですが、すいません！」

「おなりペ」「つと頭を下げるシャル。

「私、先に終わらせないといけない仕事がありますので、夕方に宿で合流ということでも良いでしょ？」「…………？」

背負つた大きな荷袋はその仕事に関係するのだろう。

「よいのではないか？ 妾も久しぶりに街に降りてきたのじゃ、まずは『アンク・サンブルス』に行つてみたいと思つておる」

街に入つてから、むしろ俺よりもテンションが高くなつてゐるニアヴが、嬉々と口を開く。

人間であれば気分屋と言つところだらうが、ニアヴに関して言えば、姿の半分は本能のまま生きる畜生そのものだから、まさに見た目通りの性格と云ふことで納得できる。

「ああ、問題ない。俺たちのことはついでだと思って、シャルは自分の予定を優先させてくれればいい。確かに初めての街だが、合流場所と時間がわかつていれば、人に聞くなりしてたどり着けるだろう」

「あう、ここまで案内してきて本当にすいません。日が沈む前には終わりますから」

単なる偶然の産物でできた同行者に、ここまで責任を持つるシャル。

愛すべき資質である。

「ああ、わかつた」

「それで、宿はですね 」

『ロッシの梢亭』といふ名前で、大体の位置を記憶に刻み、シャルとは一時の別れである。

その際、足税が浮いた分といふ名前で多少の交遊費を受け取ることになつた。さすがにこれは拒否すべき話ではなかつたので、ありがたく頂戴することにする。

時折馬車が駆け抜ける大通り。その両脇には石造りの大店と、その間を埋めるように雑多な露店が軒を連ねる。おおだな

とぎれない人並みも相まって、一種のお祭り会場のようでもある。

「はぐれるなよ、ニアヴ」

「こいつの台詞^{じや}！ オフ、良い匂いがするのうー。」

くんくんと鼻を動かし、串を売る露天へと跳ねていくニアヴ。大変にテンションが高い。

そして小さな露店であつてもその幟^{ぼり}には絵ではなく、文字。

つまり

「……思いの外、識字率が高いことこのことか」

武器屋に剣、防具屋に盾。商品イメージの具象化^{こうぞうか}といつのは、元々文字が読めない人たちに対するものだ。

それながら、文字で店名を表しているのは、客がその文字を読める、という前提に立つていてるからだ。

振り返るに、先ほど文字が読み書きできないと言つた際の青甲冑くんのとまどいも、それが基本教養として、当然だという認識に基づいてのことだろう。

次に食材である。

「これは何の肉だ？」

「こりつしゃー！ ウチはサチアロ専門だよー。」

軒に豚と猪を掛け合わせたような動物の開腹死体が吊されている。

「では、その串をいつぼ　」

「三本！」

「……三本もいらおつ」

「まいどありー！」

当然のように三本全てを受け取ったニアヴが、そこそこ大きい串だというのにぺろりと平らげていく。

「サチアロは生も良いが、この香ばしい味付けもまた、たまらんのうー。」

「油の付いた指を舐めるのはやめなさい」

そつと嗜める俺だが、狐の耳は、次なる獲物の在処を探るためにしか働いていない。

「次は、あの果実酒じゅー！」

さすがの身のこなしで、人群れを超えていくニアヴ。

「ちよつとは落ち着け」

振り返って、手を伸ばそうとしたところで、後ろから勢いに乗つたドンとこう衝撃を受けた。

そこにはバランスを崩す赤い影

「わっ、わっ」

「さつと」

こと人を避ける術においては日本人の右に出る者はない。つまり、この世界で俺以上の者は存在しない。流体、とも言つべき絶妙かつ神速の動作で倒れ込んでくる人影から身体を反らす。

赤い人物の、俺の肩を掴んで体勢を立て直そうとしていたその手が空を切り、結果、

「ちょ、うきやああ！」

その勢いを殺せず、どんがらがつしゃーんと派手に転がっていくのであった。

「いたたたあ～～」

なにやらうめき声が聞こえるが、俺は悪くないので放置。それよりも俺の目を引いたのは、その身に纏う源素光量である。推定3'000ミリカンデラ。ここまでに出逢ったパンピーの中では随一の明るさである。

それによく見てみれば、身に纏うのは、赤いロープとなにかの紋章の入ったミニマント。動きやすさ重視ではあるが、まさに日本人の思い浮かべる、一般的な『魔法使い』の姿である。

カラーン……

とそこで、俺は足元に転がってきた布にくるまれていた棒状のものに気付き、拾い上げた。

杖身は木製で赤い漆塗りがされている、杖頭は精緻に金属加工さ

れた銀環が備え付けられており、そこにじぶし大の宝玉がはめ込まれている、それはつまり、

「やはりあるのだな。『魔法使いの杖』といつものば

剣やら革鎧やらを手にして、もうその感覚には慣れたと思つていたのだが、『魔法』関連のアイテムは、それとはまた別腹の感慨を呼び起こすものらしい。

宝玉の中では、大きな4つの赤元素がくるくると回っていた。
それは、宝玉の外にでることなく、球体内部で反射している。

「なるほど、元素はいつもモノの中に込めることもできるのか

元素の動きを追うと、それは三角錐の形につながっていることが判然る。三角錐と言えば【フォックスファイア／狐火】の発動図形である。一つ色が違うが、まあ似たようなものなので、炎の杖といった属性なのかもしねり。

だが、これは……

Wandering Wonder 04(後書き)

「」までのまとめ・街に入る　だけ4話消費。

シャルさんの次の出番はWandering Wonder
までお待ちください。
12

「あ——つ——」

甲高い声に、顔を上げてみれば、先ほどの赤魔導師が、俺の方を指差していた。

ハタチといったところか。

魔導館な衣装から抜けてあれは知的なイメージを喰起させるべきところだが、大声を上げて人を指差すその幼い振る舞いから、あまり頭の良さそうなイメージはしない。

「それ！」

「か、返してください—————」

杖を返して欲しいらしい。

か、その表情はやけに鬼氣迫るものがある。落としたものを拾つてやつただけだといふのに、なにをそんなに

焦っているのか。

「もちろん返す。だが、まあ待て」

!

リーチ差で杖に手が届かない女が半分涙目になりながら、縋り付いてくる。

「ハイドウハイドウ」

だが、少し気になる点があるので、そんな女魔導師を片手でいなしつつ、杖の観察を続行する。

気になった点というのは、宝玉内部の源素に関する問題だ。

ニアヴがあの林道で見せた【フォックスファイア／狐火】は角度がきれいに60度を保った正三角錐だった。

同じく、【ウォーターフォウル・レイン／降鶴雨】の六角形は120度。先ほどこの身で味わった風の衝撃魔法も非情に整った図形だったのだ。

それに比べ、この杖の宝玉内の三角錐は、一辺の長さも角度もバラバラで、まるでひっくり返ったショートケーキである。

その崩れたショートケーキが球状の宝玉内で「ゴシンゴシン」と、乱雑な回転を繰り返しているのだ。

端的に言えば、こういう雑な仕事は、見ていてとても気持ちが悪いのだ。

単純にこの杖の質が悪いだけなのか、元からこういうものなのかも知らないが、元素を見るにとつては、気になつて仕方ないことだった。

……直せるものだらつか？

そこまで思考すれば、ただやつてみれば判然とじとを、躊躇する俺ではない。

全てはトライアンドヒラー。実践あるのみ。

そもそも、直らなかつたところで問題はない。

試しに、杖の宝玉内の赤元素に、停止の念を送つてみる。ググ……と源素の動作が鈍り、その動きを停止した。ふむ、なんとかなるっぽいな。

ならば後は調整して再始動が出来るはずだ。

「ちょ、え、なにをして」

図形調整のため、杖を色々な角度に持ち直す俺の行動に、女魔導師が不安の声をあげる。

「すぐに終わるから、少し待て」

三角錐の一辺を、宝玉の直径の三分の一に保つ、その角度はきっと60度になるよう調整する。当然四面の面積は同一となり、回転角度も中心線が垂直に通るように調律する。

といつても、それは俺の脳内イメージを宝玉内の源素に投影するだけの作業なので、女魔導師には俺がなにをしているのかわからぬことだろうが。……ん、完了った。

キュイイイン

そこにはまるで今までとは違つ、整然と宝玉内で回転する赤元素の姿があった。

「ふむ、こんなものか。ほら、もういいぞ」

「あ……ありがと や、当たり前です！」

やつと返ってきた杖を手に、安堵しながらも「ちりを威嚇していくのを忘れない。色々と忙しい娘である。

まるで宝物を持つかのように、再び布にくるみ直す女魔導師。よほど大事にしているようだ。

「まだなにがあるのか？」

「……あなたにこれを盗もうとこう意図はなかつたようですね、その点は謝罪いたします」

キリッと姿勢を正し、深々と頭を下げる。

「……

「どうして黙るのですか」

「……今更そんなキャラを通そうとしても無理だと思つが」「なつ、そんなんぢやないんだから、や、ないのであります」

……田頃から使い慣れていらない言葉を使つといつなるとこう見本市だな。

質の悪い杖、幼い言葉遣い。この世界の新米魔法使いといつ所だらうか。

「そもそも俺はお前の知り合いでもなんでもない。口調など気にしても仕方ないだろ」

「そういうわけにはこきません。私もラスケイオンの一員としての威儀を見せねばならない立場なのですから」

ラスケイオン？ もしかして、ルーケイオンとなにか関係のあるのだろうか。

「そう言われば確かに青甲冑と同じような紋章を付けているな」「ラスケイオンをご存知なかつたですか！？ ははあ、それで私にあんな失礼なことを」

「うむ。立場を知つていても俺の行動は変わらなかつたと思うがな。あなたは街の住民ではないんですね。わかりました……では改めてご説明します。ルーケイオンは都市防衛の騎士隊、ラスケイオンはその魔法師隊です。どちらも最低でも準騎士の爵位を与えられるだけの実力と名誉をもつ役職なんです」

「聞いてもいないことを、得意満面に語られてしまった。
もちろん、無償の情報提供には感謝であるが。

「そして、私はラスケイオン所属のセスリナ・アル・マーズリーと申します！」

「かみおつた。使い慣れない言葉遣いで通そつとするから無理が出るのだ。

「（ヒ）――寧にじづも。私は無所属のワーズワードと申します」

「とりあえず、まねてみる。

「ま、真似しないでください」

「おこられた。

しかし魔法使いの部隊か……確かに人間の魔法使いは国に管理され

ているという話だつたな。

その魔法使いの利用方法が戦闘部隊であるところとは、魔法は、概ね争いの道具、つまり『兵器』として利用されているということだろう。

やれやれ……先ほど確認した火や水を産み出すという物理法則無視の魔法だけでも、どれだけの平和利用ができると思つていいのか。思いつくだけでも、治水、農業、製造、エネルギー生産、環境保護……この魔法という技術には無限の可能性が秘められている。それを

「セスリナ・アル・マーズリーだつたか」

「はい？」

俺の失望を含んだ声に、少しどまどいながら応えるセスリナ。

「お前は悪くない。俺が言えるのはそれだけだ」

だが俺の失望は、この世界の価値観の中で生きる彼女にはなんの責任も話だ。

「そんな、いえいえ、確かに私も前方不注意でしたから。……えへへ、悪くないと言ってもらえるのはありがたいですが」「ん？　ああ、それはその通りだ。今後は気を付けるよ」「えつ」

なにをそんな驚いているんだ、この女は。

あの状況で俺に一分でも責任があつたとでも思つていいのか。

納得いかないという瞳で俺をねめつけるセスリナだが、幼い容姿の彼女がやると拗ねた子供の上田遣いにしか見えないというのが、悲哀を誘う。

代わりに微笑みを返してみる。

「なっ！？　ふんっ、もついいですっ！　私も急いでいるんですか
らー！」

「そりゃ

「でも、一つだけ教えてください……あなた、この杖に何かしよう
としていませんでしたか？」

「さつきのアレか」

魔法使いと言つても、源素が見えなければ、俺がなにをしたのか
判然らないか。

「杖を調律させもらつただけだ。なに、悪くはなつていらないだろ
う」

「はい？　……意味が判然らないんですけど」

調律では意味が通じないのか？　確かに、魔法の杖をメンテナン
スする行為は別の呼び方があるのかもしねりないが。

「はあ、なるほど、この杖がどういうものか、わかつてないんです
ね」

「…………？」

これまでにない冷静な響き。何が言いたいのだろうか。

「いえ、それなら良いんです。では、私はそろそろ
「そうだな。俺もそろそろ時間も惜しい。ではな

「はい」

ペコリと一礼をして、歩き出すセスリナ。

彼女の、最後の態度の変化が気になるところだが、俺は俺でやることが山盛りである。

もし次に会う機会があれば、聞いてみればよいだろう。

「待たせたな、ニアガ

「

と。

「……おこ

喧嘩の露店群を見渡すが、そこには狐の姿も、狐の纏う要素の明るさすら見つけることができなかつた。

「初っぱながら迷子とか……」

いないものは仕方ない。

迷子の狐は置いて、俺は俺で情報の収集をさせてもらひ。たしか、『アンク・サンブルス』という観光名所に行きたいという話だったので、そっちの方に歩いていけば、いずれ見つけられるだろ。

よく考えれば、別にこれから行う情報収集に魔法的な要素は必要無いので、狐がいなくても問題ないしな。

むしろ、一人である方が効率が良い。

……
……
……
……

「……植物、精子……『果実酒』の店。こつちば、土器の店だな。
ふむ、溜める、食器……で『壺』と」

看板と商品、それに街の喧噪から適合する情報を拾い集めることで、文字を解析してゆく。
文字記号のユニーク数は少なく、その組合せも単純である。漢字よりもハングル語の構成に近い。

当然読みだけでは理解できない文字は存在する。主に固有名詞がそれだ。

例えば日本語訳で『森約束の店』と書いてる看板、それをそのままの意味に受け取れば単純に混乱を生むが、こちらの発音の表記にすれば『ヴァンスローの店』となる。つまりは店主の名前を冠した店なのだろう。

祭でもあるのかと思われるほどの露店が軒を連ね、活発な呼び込

みと商品のやり取りの会話が交わされる。解析のためのサンプリングには事欠かなかつた。

ものの数十分で一般生活で利用されるレベルの基礎的な文字の作りと読みについては吸収できたので、残りの時間は風土・文化レベルについて観察しながら街を歩くことにしよう。

『ゴーリカ・ソイル』

一言で言えば縁と石造りの街である。

石造りの街並みと言えばヨーロッパを連想するかもしれないが、実は東南アジア系イメージの方が近い。

軒を並べるのは重厚な石造りの店舗や屋敷、屋敷はとにかく年数による風化を感じさせ、その上に縁の木々が覆い被さっているのだ。比較的新しく作られたと思われる建物は、木造である。

『昔に滅びた王国遺跡にそのまま今の國の民が住み着いている』といふシャルの事前情報通り、過去に作られた石の街、そこに人々が住み着き、今の街の形になったのだろう。

区画整備された街並みに、上下水道（井戸ではなく、石造りの用水路『上水道』がちゃんと引かれている）の再利用ができるため、住み着くのは当然のことだつたのだろう。

至る所に歴史の風格を感じさせ、かつ新旧が融和した街並みは、思つたよりも嫌いではなかつた。

そこに異国情緒あふれる人々が行き交う。この場合は異世界情緒と言つた方が正確か。

生活感バリバリの小汚い服装のものもいれば、いわゆる冒険者な革鎧姿の者もいる。

驚いたことに、明らかに人外 この場合は、獣の特徴を持つ人

型人種を指して言つ　　の姿も珍しくないのだ。

ニアヴという存在が特別なものではないとすると、つまり、異なる種族が一緒に暮らしている状況だというわけか。

しばらく大通りを進むと、街を分断する川があつた。

そこにかけられた大きな橋もまた石造り。構造的にはアーチ型石橋であるが、とにかく巨大である。

対岸まで100mはありそうな大きな川に幅15m程度の年季の入つた石橋がかかっている。

朱雀門といい、石造りの街といい、その滅びた王国というのは、鉱物加工、石材建築技術において、かなり高い技術水準を誇つていたに違いない。

この世界にある『太陽』。その動く向きが地球と同じと仮定するならば、川は街を南北に切断しており、俺は街の南側から北上している、ということになる。

朱雀門は本当に朱雀門だつたわけだ。

見たところ、街の南側が商業地区、北側が行政地区といったところか。住民も南側は一般層、北側に富裕層が住んでいるのだろうと推測できる。川に面している屋敷の敷地規模が全く異なっているのがそれだ。

さて、問題はこの橋を渡つてしまつて良いのかという点だ。

「すまない」

「ん、なんだいお兄サン？」

『アンク・サンブルス』に行きたいのだが、この橋は渡つてもいいものなのだろうか？

「そうさね、橋を越えてまっすぐ進めば、街の中心トルテ広場。『

アンク・サンブルス』はそこにあるさね」

「なるほど、広場にあるものなのか。情報提供感謝する」

「あはっ、面白い言い方をするお兄サンだね、もしかしてお忍びの貴族サマだつたりするのかい？」

「その可能性はないな」

「あはっは。それは残念さね」

人柄は気候が創り出すものである。店売りの陽気な声や、住人の人当たりのよさは、この地が温暖な気候に恵まれた土地である証拠だろう。

「ついでにもう一つ。狐の耳をつけた、変わった服装の娘が通らなかつただろうか？」

「獣人の娘サン？　あーいたねえ。狐族サンだつたかどうかは見てないけど、なんだか落ち着きのない様子で橋桁をポンポン跳ねてつた子がいたかなあ。もしかしてお知り合い？」

「可能性は皆無ではない」

「というか、絶対そうだろ」。

「あはっは。お役に立ててなによりさ」

ぶんぶんと手を振つて見送る獣人の物売りに一礼で応え、橋を進む。

見下ろす先、悠然と流れる川の透明度は、地球では貴重なものだろび。

川の濁りと引き換えに、人類は高度な科学技術を進歩させてきたのだから。

その最たるもののがアイシールドと、そこに投影されるネットワーク上の仮想空間である。

全ての娯楽がワンクリックで起動され、全ての情報がワンウインドウに表示できる世界。

発声もコマンド入力も必要とせず、思考のみでその全てが実行可能なシステム。

そこでは、自由気ままなネットライフを送ることも、神の如く権能を用いて、現実世界に影響を及ぼすことも可能だった。

神学者が言った、肉体の軀から解き放たれた真なる世界、それが神学の対極にあるエリ技術によつてもたらされたというのだから、これは大いなる皮肉であらう。

そこでは人類が未だ到達していない想像上の未来都市も、時代と共に滅び去つた太古の都市も、時間の概念を無視したあらゆる映像がリアルに投影できた。

俺はOSデフォルト設定のポリゴンの荒いマイハウスを利用して

いたが、窓の外に映る景色は、自然影像を選択していた。

特にお気に入りだったのは、清流流れる、日本の原風景である。

人類が失った水の透明さを、俺は仮想世界で取り戻すことになったわけだ。

そして、その仮想世界こそ本来なら俺が行くべきだった場所。だがそれはならず、今俺はこの右も左もわからない異世界にいる。事実である以上、状況を否定してもしかたないが、地球に帰れるのかも含めて、今後どう行動するべきか、その指針も考えなければいけない項目の一つだった。

「まだまだ課題は多いな」

とはいえ、まずは

「この街最大の観光名所だつたか？『アンク・サンブルス』とやら、俺も楽しませてもらつか」

この何気ない異世界の街の散策は、十分に俺の興味を満たしていくものだった。

橋を渡つた先は、これまでの商業地区の喧騒とつりて変わって上品な街並みを見せた。

いわゆる商店もこれまで以上の大規模店舗しかなく、門構えも立派である。

貴族の館と思わしき門前は掃き清められ、衛兵の姿もちらほら映る。

更に歩くと道幅はさらに広くなり、大きく円形に視界が開けた場所がそのまま広場となつてゐるようであった。

ぐるりと見渡せば、同じような大道が左右から伸びてきており広場で丁字に交差してゐる。

と言つては、ここが街の中心『トルテ広場』なのだろう。

ちなみに正面にはなだらかな階段が伸びており、その先は宮殿へとつながっていた。

……王様でも住んでいるのだろうか？ それともルアン公といつ奴か？

『オオオオオ……』

広場中心の人だからには絶えず歓声が上がつていた。

狐は……ぱつと見では居るか居ないかわからないな。

夜ならともかく、この口中時間帯に、光量感知だけで特定するのは難しそうだ。

ま、とりあえず、行ってみるか。

「……失礼、こっちも失礼

わかつていたことだが、この街の住人に『順番待ち』という概念はない。先に進みたいなら、邪魔なものは押しのけて進むのがこの場での常識的行為である。文明レベル的な意味で。

「はい失礼、よつ……ととつ」

その際、勢い余つて、人の輪の最前線の一歩内側まで踏み込んでしまったのは『愛敬だらう』。

「ん？」

その俺の身体を、七色の光がすり抜けた。

『オオオオ……！』

一際大きな歓声が上がった。

「なんだこの光は？」

目の前には、角度80度ほどだらうか、やや傾いた金属製の支柱が立っていた。

その先に視線を向ける。

「まづ

俺をして感嘆せしめるもの。

支柱の先、高さ2mほどの位置に、巨大な宝玉が固定されていた。巨大な宝玉は、野外に設置されているにもかかわらず、疵一つ無い美しさである。

それが、七色の光を反射している。七色の光は宝玉を中心にして発生していると思われる虹の円環の光だ。その虹が、くる、くると回っているのである。

虹の円環は、それが何を意味するのかは判然らないが、当然ただの偏光現象ではなく、魔法によって産み出されたものだろう。それを発生させているものこそ『アンク・サンブルス』。その虹の円環に触れないギリギリの位置には人は集まり、その美しさを堪能していた。

人の輪を一步踏み出してしまった俺は、その虹に思いつきり身体が触れてしまつたと言つわけだ。

虹に触れたことで身体になにか異常があつても困るので、その場で自分自身の身体をチェックするが、特におかしな点は見つけられない。

「よオ、兄ちゃん！ 虹に触つちまつてなんともねえのか！」

観衆の一人が無遠慮に声をかけてくる。

「特になんともないと思われるが……何か問題があるものなのか？」
「がははっ、それがわからねえから、『アーティファクト』なんじやねえか！ 兄ちゃんはちと冷静すぎて面白くねえがなつ」

「……なるほど」

確かにどんな効果があるのかわからないと言われて、むやみに触りたいものではない。

とはいって、みな経験則として、無害なものであるとわかっているのだろう。

でなければ、こんなに虹の回転範囲ギリギリまで近づいたりはないはずだ。

そして、たまに虹にうつかり触れてしまった俺のような相手に対し、いつもやつてからかいの言葉をかけているのだろう。魔法というものに免疫のない一般観光客であれば、恐れおののく反応を示してもおかしくはない。

俺は改めて『アンク・サンブルス』に手を向ける。

「なるほど、これは見たことがない美しさだ」「がはははっ、つたりめえだぜ！『アンク・サンブルス』は世界一の『アーティファクト』だぜ！」

そんな血漫に満ちた誇らしげな声に、皆納得のうなずきを示している。

やれやれ、俺はそつひとつ意味で言ったのではないのだがな。

美しいといったのは、『アンク・サンブルス』の中心たる巨大宝玉^玉、その内部にある源素についてである。

まず巨大である。この身にまとわりついてくる源素は、最大でもピンポン球サイズなのだが、『アンク・サンブルス』内の源素は、その一つ一つが野球の硬球サイズの大きさなのだ。

更にもう一点。これまで見てきたのは白・赤・青・緑・黄の五色だったのだが、この宝玉内には更に紫・黒の一色が存在していた。合計七色七つの源素が宝玉内で三次元の幾何学模様を刻むように絶えず形を変えていくのだ。

セスリナとかいう女の持っていた杖とはランクの違う精密な動きである。欲を言えば、最後の黒源素の動きが他よりワンテンポ遅れているところが画竜点睛を欠いているが、コンピュータでシミュレーションしたかのようなその動きは、俺をして唸らせるものだった。

ドンッ

と、宝玉に集中していた所に背後から襲撃を受けた。
なんだ、体当たりか？

「お主……どこのをほつき歩いておったんじや」「

「……なんだお前か」

「気がつけばお主はあらんし……街では妾の鼻も利かぬし!」

いや、勝手にテンション上げて跳ねていったのはお前の方なんだが。

反論しようと振り向いたところでそれに気付いた。

赤みを帯びた目元。伏せられた耳。ぎゅっと握られた、服の裾。

……やれやれ。

俺は、ポムポムとその頭に手を乗せる。

「悪かった。もう皿を離さない」

あやかよに優しくその頭を撫でる自分の姿は、全く持つて柄じゃないと苦笑せざるをえない。

「……うむ」

迷子の迷子の狐さんは、案外あつけなく見つかったのであった。

「確かにこの数理的かつ魔法的な美しさに比べれば、『朱雀門』は造形の美で完結してしまっている感があるな」

「うむ、言つてしまえば朱雀門は『アート・アーティファクト』にすぎぬ。『マジック・アーティファクト』に比べれば、さすがに見劣ることもあるう」

「マジック・アーティファクト?」

「くふつ、知らぬよづじやのうー」

俺の無知に気をよくした狐が、得意満面の笑みで応える。
泣いたカラスがもう笑うというやつか。あいにくこちらは狐だが。

「そもそも『アーティファクト』と呼ばれる遺産は大きく一種類にわけられる。一つは『アート・アーティファクト』とよばれる、例えば朱雀門のように材質不明なもの、『ワス・オーザリー』のように精緻精巧で再現不能なものじやな。

それらは古王国の威光を偲ぶアーティファクトであつて、美術的価値は高いが、お主のいうとおり、言つてみればそれだけであるとも言える。

じゃが、アーティファクトにはもう一つ、全く別の価値、魔法の効果が付与されたアイテムがある。『雲を裂く剣』、『大地を搖るがす鎧』、『炎を纏う杖』、『傷を癒す宝玉』、『酒の溢れる壺』、

『知識を与える書』

指を折つてそれらの名をあげるニアヴ。

「なるほど理解した。つまりそれが

『マジック・アーティファクト』といふことじや。それらはまさ

に至宝であり、その価値は計り知れぬ。アーティファクトの発掘を目的とした冒険者という職が成り立つておるのも、未だ発見されでおらぬアーティファクトが確実に存在するからじや。

『アート・アーティファクト』であれば10年、『マジック・アーティファクト』であれば、一生働かずに暮らせるだけの価値で取引されるというのう。妾もいつか所有したいものじや

つまり、『冒険者』とはそういう一攫千金を狙つたアーティファクト探索者のことなのか。

「故にアーティファクトの所有者は、その存在を明かさぬものじや。まあ当然であるな、それほど価値のあるものならば、悪しき者にとっては殺しても奪い取るリスクに値するものじやろつ」

物騒な話だ。

「国内に古王国遺跡の多く残る『ラ・ウルターヴ』であれば、アート・アーティファクトの建造物が各都市一つずつくらいは残つておつてな、それぞれが觀光名所になつておると聞く。

その中にあつて、『アンク・サンブルス』は一般公開されてある唯一のマジック・アーティファクト、まさに天下の逸品ということじや。見よ、この美しい虹を！ 数多の魔法を修める妾とて、これがいかなる効果を持つ魔法の道具であるのか、予測もつかぬ。これほど面白いものはそつはあるまい！」

「理解した故に聞くが、『マジック・アーティファクト』は貴重なものなのだろう。なぜそんなものが野外に設置してある。この街はそんなに治安がよいのか？」

「それこそ愚問じやな。『アンク・サンブルス』は魔法効果の塊じや。妾にわかるだけでも『破壊不能』『存在固定』『反魔法』の最低三つの効果を持つておる。『反魔法』の効果でいかなる魔法も『

アンク・サンブルス』には届かんし、『存在固定』の効果で盗み出すこともゆめ叶わぬであろうな」

なるほど。聞くだにファンタジーだな。

逆に言えば、宝物庫に入れたくとも、入れられないといふことか。それでは、放置しておくしかない。

「それ以外にどのような効果があるものか、それは未だにわかつておらぬようじやが、少なくともこの美しい虹は人の目を楽しませよう。國が滅んでも『アンク・サンブルス』は不滅じや」

「異論はないな。お前があれほどテンションを上げたのもわかる話だ」

俺とニアガは、人の輪に交ざり、虹の円環とその中に位置する透明な宝玉を鑑賞していた。

「ちなみに、宝玉の中では巨大な7色の『元素』が様々図形を描いている」

「むつ、そう言えばお主は魔法を光の粒として見えるんじやったのう。……まさかその目で『アンク・サンブルス』がどのよつの魔法の力を持つているのか、知ることができるのかや?」

「いや、俺に見えるのは元素の動きだけだからな。さすがにビのよくな効果を発するものかまで、知ることはできない」

「ふう、驚かせよつて。そんなことができれば、それこそ大いなる

衝撃を受けるわ」

逆に言えば、通常魔法として、同じ元素の動き、つまり魔法効果

を発生させる」とはできそうだがな。

とほいえ、俺にまとわりついている源素の中に紫と黒はないので、全く同じものは再現できないか。

「まあ魔法の効果はしらんが、宝玉の中に源素を封じ込める、という基本的な作りは先ほど見た魔法使いの杖と同じだしな。その上位版と言つたところだらう」

「魔法使いの杖、じや」と？」

怪訝そうに繰り返すニアヴ。

なにか引っかかることを言つただらうか。

「ああ。さすがにこの『アンク・サンブルス』といつマジック・アーティファクトを見た後では、粗末なものだったと言わざるをえないが」

「うう言つ意味では…… やつをからばになつてしまつがなにワントンボ遅れた黒元素の動きである。

この黒元素も先ほどの杖と同じよつて調律できるかもしね。やってみるか。

「待て、お主、何を言つておるのじゃ。もしそれが魔法効果を宿した杖だとこうなら」

「すまん、ちよつと試したいことがある。あとでじつてくれ

とうあえず距離が遠すぎるので、一步足を進める。
虹の円環に身体が触れるが、それが無害であることはわかっているので、気にしない。

更に一步。

輪から抜け出し、『アンク・サンブルス』の宝玉を見上げる俺に、

観光客の視線が集まる。

源素の動きは、決して早いものではない。

7つの源素が円となり、クロスし、立方体と変化し、波を作り、また円に返る。

宝玉に手のひらを向け、指を即興の物差しとして利用、幾何学的に線形非線形を繰り返す源素の動作パターンを脳内にインプットする。

「待て待て！ 何をしようとしておるーー？」

俺の行為に不安を感じたらしいニアヴが後ろから俺の名を呼ぶ。もうちょっととなので待つて欲しい。

よし、覚えた。

では一度動きを止めてつと。

停止の念を送ると、杖の場合と同じように、宝玉内の源素はその意を受けて、ピタリと停止した。やはり、この辺は同じか。

源素運動を停止したせいで、虹が消滅した。おそらく一時的なものだらう。

まずはここまではよし、と。

細かい調整を行う前に、狐の用事を終わらせておくことにする。

「よし、いひつけのくだ。で、なんだ？ 話があるなら聞くべ」

そう言って振り返った俺の耳に、あんぐりと口を開けて放心する狐の姿が飛び込んできた。

……少し訂正しよう。

あんぐりと口を開けて放心する、全ての観衆の姿が飛び込んでき
た。

「な、な、な」

ああ、消えてしまつた虹のことか。

「虹なら大丈夫だぞ？ 消えたのは一時的なものだ。『調律』がす
めば、また出でくるだろ？」

『は、はああ！？』

不安を払拭すべき行つた現状説明のはずなのだが、なぜそんなに
目を見開く必要があるのだろう。広がるまぶたの可能性は無限大だとでも言いたいのか。

「うーむ……触つてはいけないものだったのだろうか。まあ貴重な
ものだとこいつのは先ほど聞いたが。

「ま、待て。待つのじや」

よろよろと、ニアヴガ声を出す。

いち早い立ち直りは人生経験の差か、はたまた慣れか。

「なんだ」

「お主なんと言つた！？ アーティファクトを『調律』すると言つ
たかや！？」

後ろの観衆が恐ろしい勢いで「ククク」とうなづく。

「そう言つた」

「ありえんじやろー？ それができぬからこそ『アーティファクト』なのじゃぞ！」

「なるほどな。確かにできると断言するのは早計だった。では、ものは試した。やってみよつ

「いや、そういう意味ではなくじゃなー？」

言いつても仕方ない。

源素自体が俺にしか見えないのだから、旨を納得させるには実際に調律して見せるしかないわけだ。宝玉に向き直り、動きがずれていた黒源素の位置を慎重に動かして行く。

……なんだ。先ほどの杖同様、何の問題もなく俺の意志を受け入れて、動くではないか。

アーティファクトだからと言つて、調律できないわけではなさそうだ。

「よし、オーケーだ」

「ほ、本当にかや……」

「これだけのことなぜ静寂が生まれるのかわからぬ。

「ああ。あとは動かすだけだ」

「クリと誰かのつばを飲む声が聞こえる。

再起動を念じる。

俺の目にだけ、宝玉内の7つの源素が円となり、クロスし、立方体と変化し、波を作る動きが見える。

問題ない、これまで通りの動きだ。黒源素が正常な動きに戻ったため、その動きはより美しい。

だが、

「おや？」

「どうなつたのじやー？」

……源素は既に動いているのだが、虹の円環が発生しないな。
つまり

「うーむ……失敗したようだ。悪い」

『ちょっとおおおおおーー?』

それは観衆全員からの総ツッコみであった。

街一番の觀光名所の『アンク・サンブルス』は魔法効果により恒久的に発生する虹　これを幻虹という　その美しさが名物だった。

それが無くなってしまえば、ただの透明な宝玉である。

「おかしいな。源素は間違いなく動いているのだが

首を捻つてはみるが、出ていないものは出でていない。

首を捻る俺と、依然絶句のニアヴ、それにムンク状態の観衆たち。なかなかに気まずい沈黙が流れていた。

「おい、何を騒いでいるー！」

先ほどの中はさすがに高すぎたらし！」

『アンク・サンブルス』は、その持っている魔法効果から、いかなる方法による盗難もできないという話だが、だからといって警備が無いわけではない。

べつたりではないが、トルテ広場には巡回する青甲冑 ルーケイオンの姿があるのだ。

となれば俺の取る手は一つである。

「ニアヴ、準備はいいか？」

「ハツ！ な、なんの準備じゅ」

当然、逃げるための準備、である。

足元に集めるのは、黄元素×1と白元素×7である。
それらを組み合わせた逆回転の一重円

ニアヴの腰に手を回し、ぐっとその身体を引き寄せる。

「な……に、に……」

「さあ、逃げるぞ！」

朱雀門で見たニアヴの空氣操作魔法（魔法名知らず）を発動せざる。

フオンン ッ

OK。もしやと思ったが、無声での魔法発動はやはり可能だったな。検証完了だ。

迫つてくるルーケイオンと突如足元から噴き起しつた強烈な爆風

に、観衆からは悲鳴と怒号が沸き起る。

足元から爆風を産み出す。

バシュウウウウッ！

背中を柔らかく押し上げるように威力調整した爆風は、想定通り俺とニアヴを空中に持ち上げ、一足飛びに観衆たちの頭上を超えた。

バシュン！

着地地点でさらにもう一つを発動。ニアヴを抱え、重量を増した俺の落下速度を相殺する。

「なつ、【バニシングボード・ニアノ滝空鳳】を【コール／詠唱】もなしに使うじゃと！？」

「ん？　お前はできないのか」

これは【滝空鳳】という魔法なのか。一応覚えておこう。

輪から抜けてしまえば、こちらのものである。
ルーケイオンから逃げまどぐ人の群れに紛れ、あとはひた走るのみ。

ニアヴの手を引き、来た道を引き返す。

「う～む。うまくいくと思ったのだがな
「バカもの！　『コーリカ・ソイル』の歴史以前からある至宝になんたることを……いや、いやそれ以前の問題としてじやな！？」
「おっと、小言は後で聞く。今は逃げるぞ」
「全く、お主は次から次へと……信じられぬことばかり起こしある

！」

言つたその声は、存外俺を責める響きを含んでいなかつた。

「ゴウン

「おい、何があつた！ アンク・サンブルスの幻虹が消えているではないか！ こんなことは前代未聞だぞ！ 誰の仕業だ！？」

石畳に押しつけられ、尋常ならざる迫力で問責されているのは、先ほどワーズワードにからかいの声をかけた街の大工ゴーデンである。

たまたま逃げ遅れた彼の運が悪いだけだが、そんなことを考慮してくれるルーケイオンではない。

「さあ、言え！」

「うぐぐ……許してくれよえ！ おれにも何が起つた、わからねえんだ！」

その言葉に嘘はないだろう。

彼は仕事が空けば、こうしてアーティファクトを見に来る。ただそれだけが楽しみの街の大工なのである。

今日も観光客に混じつてその美しい七色の虹を眺めていただけなのだ。

勢いあまって虹の輪に触れてしまふ観光客をからかうのが、楽しみの一つだということはあるだろうが、それは罪に問つほどの悪行

ではなかつた。

今日は若い男だつた。

見ない顔であつたが、アンク・サンブルスは国内だけでなく、世界的にも有名であるため、それも当然のことだ。

その男が知り合いであろう獣人の娘と一二三韻葉を交わしたかと思うと、さつと宝玉に手を伸ばした。

それが何を意味するのか、彼にはわからない。

だが、もし悪しき企みがそこにあつたとしても、どうともできるはずがない。アンク・サンブルスが何ものも寄せ付けない無敵の防御能力を持つていてるというのは有名な話だからだ。

だが、そこで恐るべきことが起こつた。アンク・サンブルスの虹が消えてしまつたのだ。

最前列で見ていたゴードンの驚愕は、計り知れぬものであつた。細かいやり取りは聞き取れなかつたが、最終的に、アンク・サンブルスを元に戻そうとして失敗したということが聞こえてきて彼も皆と一緒に腹から声をあげたのだった。

ゴウン

組み伏せられ、呼吸も碌に出来ない状態でゴードンはなんとかそこまでの状況を説明する。

「バカをいうな！ アンク・サンブルスは帝宮最高魔法師ウォルレイン・ストラウフト様でさえ、いまだその魔法効果を解明できてるんだぞ！」

「ウグ……そんなこと、おれに言われても……っ」

「カーン　カーン

そこで、『ードンの目』が見開かれた。

「あ、あ、あ　」

空を指差す。

「なんだ、しつかり話せー！」

広場に残る他の人々も同様に、信じられないものを見ていた。
みな一様に目を見開き、顎を落とし

男を組み伏せているルーケイオンの衛士のみが気づけない。

「カーン　カーン　カーン

そこには街の外縁を根とし、ゆっくりと円を描いて変遷する大輪の幻虹……古の王国にて『アンク・サンブルス／孵化卵』と名付けられたアーティファクトの、本来の機能が動作し初めていた。

主人公の一人称だけで書き進められる。
そう思っていた時期がなこにもありました。

「ハアハアハア……」

「お主、あれほど手際よく逃げ出しておいて、なんじやその体たら
くは」

「ゼ……ハ……体力には、自信が、ない、のだ」

現代ツ子をなめないで頂きたい。

「それよりも！」

街を分断する川にかかる石橋の上で、ニアヴガビシリと天上を
指差す。

「あれはどうこう」とじゅう！？」

見上げる街の上空に、虹が架かっていた。

「つむ、俺も疑問だつたわけだ。我が事ながら、調律に失敗したと
は思えなかつたからな。動作を正常化させた結果、虹の発生する半
径が広くなつたのだろう」

おそらく今、この街の殆どの住人が同じように、上空を見上げて
いる。

「大事じゅぞ！？」

「俺の国には『大は小を兼ねる』と言つ言葉がある。なに、問題が
あるならその時に戻せばいいんじゃないか？」

「く……お主のことだ、それも嘘ではないのであらうな……本当に

アーティファクトを調律することができるのかや……」

「うだと言つたはずだが、どれだけ信用がなかつたのだろう。

「それほど驚くことではないと思うのだがな。魔法使いであれば、道具に魔法をかけることができるのだろう? アーティファクトだと言つても、内部の複雑さが違うだけで、原理は同じなのだから、どうにもできないということもあるまい」

「ますその認識がおかしいと言つておるのじや!」

狐が大きく頭を振る。

「なんだと言つんだ」

全くわけがわからない。

「そもそも、妾たち滝獣にも、もちろん人族の魔法使いにも、道具に魔法の効果を留める『魔法付与』の技術はないのじや! 故にその効果を引き出すことは出来ても、修理や作成は出来ぬ!」

「……」

今度はこちらが絶句する番であった。

「『魔法付与』……それは失われた神代の御業。それゆえの『アーティファクト』じゃ。先ほどの話に立ち戻れば、お主が魔法の力の込められた杖を見たというのであれば……それも間違いなくアーティファクト 古の遺産であることに間違いはない」
「だがそれは貴重なものなのだろう? 街中でそういつお田にかかるものなのか」

「ないであろうな。故に、妾はありえんと呴つたのじや。もし本当にそんな者がおつたといふのなら、その者はよほど高貴な身分のものか、或いは高名な冒険者ではなかろうか」

「……そつは見えなかつたがな」

セスリナの姿を詳細に思い出して、その上でやはつ否定せざるを得ない。

ただのずつこけ魔法使いの類だらう。

「やはつお主は非常識極まるー。」

「その点、異論はない」

俺も自分のことを常識的な人間だと言つたことはない。そこに認識のズレはないはずである。

真つ直ぐにこちらの瞳を射抜いてくるニアヴ。

俺もまた、搖るぎなくそれを受け止める。

「自分がどれほどのことを行つたのか、わかつた上でその落ち着きかや……全く底のしれん男よ。じゃが……それも含めて、お主を見極めることだが、妾の役目もあるところとかや」

ああ、わつこえは、わつだつたな。

「であるならば　聞かせるが良い」

「なんだ」

「……『反魔法』の効果があるアンク・サンブルスをじりじりって停止させた?」

その瞳の奥にキラと燃える知識欲といふ名の欲求。

人のことを散々非常識だと書いておきながら、魔法的な技術については知りたいらしい。

本当に気分屋な狐である。

まあいいが。

「答えは簡単だ。そもそも魔法を使つていない。故にその効果が発動しなかつたのだろう」

俺も自分の理論を整理する目的として、言葉を繋いで行く。

「必要なものは単純に停止を念じることだけだ。もつともそれだけでは、今までだれも同じことができなかつた理由としては弱い。要素を認識した上で、必要な念、この場合は七つの要素を同時に停止させるような並列思考を行わなければならなかつたのだろう」

「並列思考とはなんじゃ」

「例えるならば、小石を空中に放り投げて、空中でつかみとる行為。それがひとつならばたやすいだろうが、二個三個同時となると難しくなる。思考においてそれを行うことが並列思考だ」

「同時に2つ以上のこと念じるといふことかや……いや、ありえない話でもないの。確かに、それならば、偶然にも起こりえるはずもない。うむむ、とすればじや、お主の『要素』を視認できる特殊体质は、魔法発動原理の解明だけにとどまらぬ、といふことかや」

頭のよい狐である。俺もまだ自分の体质の可能性を推量しかねていたといふの。

「まず、実証済みの効果としてアーティファクトに対する干渉が可能だといつことが言えるだろ」

「調律と言つたかや。実際には何を行つたのじや」

「かみ砕けば、魔法効果を発動させる要因たる複数の要素の不整合を正し調和させた、ということになるだらうな」

「ぐぬぬ……それでかみ砕いておるのかや……」

俺に、というより、その言葉が理解できなかつた口に對して、悔しさを感じてゐるようだ。

理論の理解は、俺の翻訳^{デコード}の不完全性による伝達力不足も原因の一つである。頭の回転は俺をして感嘆させるだけの早さを持つているのだから、それほど卑下する必要はないと思うのだが。

その考え方を持つてなお、狐の悔しそうな表情を微笑ましく感じてしまつるのは、俺の性格が最悪だからである。

先ほど説明に用いた小石を、今度は橋の欄干の上で円形に置いていく。

「例を出せ。アンク・サンブルスは7つの要素が内部で様々な図形を描いていた。その一つの形が円だ。その一点が、いう、ずれているとする」

小石の一つを、動かす。

「ふむ。形が崩れてしまつのう」

「そうだ。もちろん、この形が正式な魔法発動の図形であるのかもしないが、少なくともお前の魔法には、その要素はなかつた。見せてもらつた全ての魔法が、美しい幾何学図形を描いていたわけだ」「妾の魔法が美しい?」

「ああ」

少なくとも、あの質の悪い魔法の杖より先にニアヴの魔法を見ていなければ、それをどうにかしようなどということは思いつかなか

つたはずだ。

「さうか、妾の魔法は美しいか。……くふふっ！」

「ぶわっさぶわっさ、とその太い尾が左右に振られる。
たつたの一言で、『機嫌バロメーター』が一気に上昇する。本当に
褒められる」ことが好きであるらしい。

「続けよ。源素はある一定の図形につなげることが、魔法発動の
条件である以上、その形には意味があると推定される。であればそ
れは、より法則的、規則的であることが求められるのではないか」

正弦定理、シンメトリー、黄金比　　数学的な美しさは、俺にと
つても好ましいものだ。

先ほどずりした石を元の位置に戻す。

「そのそれでいる源素を正常な位置に戻したした結果がこの大虹だ。
これを調律と呼ぶ。実証結果から見れば、不完全な源素図形が不完
全な魔法の発動につながるといつ仮定は、それほど外れたものはで
ないと見える」

元々は、俺が見ていて気持ち悪いので、直しだけなのだが。
額に手をやり、難しい顔で俺の置いた小石をみつめるニアヴ。

「……なるほど。お主の理論はわかった。じゃが、やはりこの調律
という技術は、源素とやらの見えるお主にしか扱えぬのではないか
？」

「源素が見えないというのであれば、かなり困難だろうが、魔法自
体は源素が見えない者でも使えるのだ。100%無理だということ

はないだろ？「ひ

「もし可能とこ「ひ」とこなればじや

」

その言ひ回しは、例のアレか。

「いらぬ混乱を招く、か？……言つておぐが、同じ議論を繰り返す氣はないぞ」

だが、狐の反応は、俺の想像とは全く別のものだった。

「…………いや、革新的じや

思わず、あっけに取られる。

「やりと、キバを見せるニアヴ。

やれやれ、一本取られたのはこひらの方か。
ならばその一本、取り返さねばなるまい。

「更に可能性を発展させよ。調律は可能であるとこ「ひ」とせ

続けた俺の言葉にて、ニアヴが更なる驚愕を見せた。

やはり、知識を深化させる議論は面白い。

かつて地球上の全ての知識という知識、技術という技術を貪り食い飽きた俺に、魔法といつ全く新しいものへの興味を与えてくれる異世界。

この世界は十分に面白かった。

さて、議論は議論で楽しい一時だが、可能性を諦ずるのであれば、次は『検証』が必要だな。

「試読ありがとうございます。」

「この主人公何言つてんか全然わからん」という方は「安心くだ
れい。」

私にもわかりません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3817y/>

ななしのワーズワード

2011年11月27日12時46分発行